
武神伝

メロンパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

武神伝

【Zコード】

Z7770

【作者名】

メロンパン

【あらすじ】

兄・煌輝との命を賭けた戦いの末、遂に「武神」へと辿り着いた龍騎。しかし、煌輝の想いを受け止めた龍騎はもう一度旅に出る。新たな戦いの果てに龍騎は何を想うのか!そして「武神」として人の武芸者としてどこまでの「高み」に登れるのか!

武神伝第3部「龍騎神話編」が幕を開ける――

番外篇 人物紹介（前書き）

今回は話の続きではなく、今までに登場した人物達の簡単な紹介をします。これから読む皆さんにも分かるように作るので、本編を読む前に一度見ると良いかと思います。

番外篇 人物紹介

第壹部 「武神激闘編」について

第壹部は神鳴流の大神 龍騎が、武神を目指して戦うというお話です。本当はここまで道のりをメインにして、武神になつて終わらすつもりでしたが色々な事情で無理やり武神戦に持つて行つてしましました。これからその途中途中の話を番外編で書く予定なのでそれもお楽しみに。今さらですが、ほとんどの人物は高校生、17、18歳ぐらいで考えています。たまに例外はいますが、龍騎や、村瀬などは、17歳ぐらいだと思ってください。

第壹部の人物紹介

壱人目 大神 龍騎

ごぞんじ本編の主人公です。流派は神鳴流武器は刀です。刀の名前は「龍明」で一刀流で戦います。次は軽く技紹介です。

神鳴流奥義 壱の型 花瓣

花瓣は刀の柄を相手の腹に押し込み、ひるんだところで刀を振り上げ、下ろす際に相手を袈裟斬りにする技です。使つたのは桐生戦と煌輝戦です。一番最初の技なのに出番が少ないですね。これからもう少し使ってあげようと思います

神鳴流奥義 弐の型 翠蓮

翠蓮は相手の前で一度刀を振り、刀を持ち替えて相手の前で今度は突きになるという、意外と複雑な技です。使つたのは花瓣と同じで桐生戦と煌輝戦です。出番が少ないのでもう少し使いたいと思います。

神鳴流奥義 参の型 虚蝉 うつせみ

虚蝉は相手の前で急加速し、横から後ろへ回り込んだあと空中に舞い空から相手を斬る大技で龍騎の得意技です。使ったのは八雲戦と煌輝戦と村瀬戦です。得意技なので一番出番が多いです。

神鳴流奥義 肆の型 麒麟 きりん

麒麟は相手の攻撃を潜ってかわし、その勢いで相手の元まで急接近してそのまま斬る返し技です。使ったのは煌輝戦のみですが、窮地を救つた大活躍の技です。

神鳴流奥義 極の型 虚陽 うつかげ

虚陽は虚蝉の動きから、刀を投げて相手を倒す現段階の龍騎の最強の技です。正確に言うとこの技は龍騎のオリジナルなので神鳴流奥義ではありませんが一応こうこうふうになっています

神鳴流奥義 陰技 連撃 れんげき

連撃は一度大きく袈裟斬り（縦切り）下後に腕と手首をひねつて肩甲骨をずらして刀の間合いを伸ばして敵を切り上げする技です。使つたのは丸山戦ですがこれから活躍すると思います。

神鳴流奥義 御の型 猛雷鎧 たけいかぎ

猛雷鎧は刀を敵の斜めから斬っている間に刀を握っている右手と左手を持ち替えて刀の軌道を変え、防御の無いところを斬ります。その動きが雷鎧のようなのでこの名前です。使つたのは小林戦です。

神鳴流奥義 碌の型 朱雀 すざく

朱雀は刀を握っていない手で刀を握っている手を弾くことで剣速を加速させ、武器を弾く技です。使つたのは安西戦と、佐藤戦です。

神鳴流奥義 七の型 八咫鏡 やたのかがみ

八咫鏡は、刀を螺旋状に回転させ、刀の威力を上げ、敵の攻撃を弾くのに使う技です。朱雀と合わせると、かなりの威力となります。使ったのは佐藤戦です。

式人目 桐生

鎌を使う堕天流の男で通称「死神」です。下の名前はありません。武器は「血塊鎌」です。

墮天流奥義 漆黒の爪

自分の前で一回転して相手の攻撃を弾く技です。

墮天流奥義 鎌鼬

鎌を縮めて相手を攻撃する技です

参人目 八雲

槍を使う明仁流の男です。下の名前はありません。武器の名前も考えていませんw

明仁流奥義 旋風踏込斬

斜め前に跳んで相手を横祓い（よこばらい）します。

明仁流奥義 神速五月雨突

高速で突きをしながら相手の元に近づく技です。

肆人目 大神 煌輝

龍騎の兄です。神鳴一刀流を使います。武器は「桜花」と「蓮華」です。

神鳴一刀流奥義 懺花

下段と上段を同時に攻撃し、がら空きの部分を攻撃する技です。

神鳴二刀流奥義 陽炎 かげろう

刀を投げ、弾かれた所に加速し、一方の刀で相手を崩した後、弾かれた刀で攻撃します

神鳴二刀流奥義 水蛇 すいじや

麒麟と同じです。

第壹部の紹介はこれで終わりです第弐部に行きます

第弐部 「龍騎神話編」について
こつちは武神になつたあの話です。各地をめぐり、強い人と戦うのがメインの話です

龍騎は省略します

壹人目 鬼

・・・特に言うことがありません武器は大剣です

弐人目 村瀬 芋 むらせ しあり

弓使いの女で村瀬流です。一応第弐部の大変な人物です。

村瀬流奥義 双?矢

加工されている矢を使って矢を曲げる奥義です

村瀬流奥義 破魔矢 はまや

先が鉄でできている矢を上空に放ち落下の衝撃で相手を攻撃します

參人目 丸山 宗吾 まるやま そうご

村瀬の城を襲つた軍のリーダー的存在です。流派は破爪流です武器

は一本の刀を使う「一刀流」です。

破爪流奥義　虚無きよむ

片方の刀を逆刃で持ち、敵の攻撃を受け止めながら敵を倒します。

破爪流奥義　曼荼羅の陣まんだら

両方の刀を逆刃にして、守りを固める技です。

肆人目　小林　裕馬こばやし ゆうま

龍騎と村瀬の二人旅で最初に戦つた相手です。流派は総亥流で武器は槍と刀を合わせたような武器の薙刀です

総亥流奥義　蒼風滅相撲そうふうめつそうげき

小林が軽く跳び、勢いと薙刀の間合いを活かす回転斬りです。

御人目　安西　蒼真やすにし そらま

龍騎の好敵手となつた、刀使いの相手です。流派は蘇澳流そおうで武器は刀です。何本か持っていますが、基本的に一刀流で戦います。ちなみに村瀬と合わせてこれからの大変な人物になります。今は奥義は一つしかありませんがこれから出番は作ります。

蘇澳流奥義　紅煉くれん

龍騎の連撃のように、腕をひねつて、肩甲骨を伸ばし、刀の間合いを伸ばして敵を攻撃します。

碌人目　佐藤　美穂さとう みほ

村瀬を嫉妬させた短髪の女の子です。流派は饗饌流きょうせんで武器は、太い棒状の棍こんです。一応ツンデレキャラを狙つてみましたが・・・失敗したと思います。これからどうするかは現在未定です。一応重要人物にはなります。

饗饌流奥義 むそうれんだいぎ **無双連弾**

棍を高速で突きながら進み、内蔵を破壊する技です。

饗饌流奥義 てんけつ **天穴**

狙いすました棍を相手のみぞおちに狙つて突き、その際に螺旋状に回転させ威力を上げます。

饗饌流奥義 わだこじゅう **地碎衝**

頭上で棍を高速回転させ、その勢いを利用して、相手を上からたたき潰します。

ちなみに、龍騎が殺さなかつた人物はこれからも出番はあります。今は出番のないハ雲もこれから帰つて来るのでその時をお楽しみに。読んでくれる皆さんにお願いがあります。お願いですから感想やレビューを下さい本当に欲しいです。皆さんの感想でこの作品やこれからとの作品が良くなつていくと思うので、本当にお願いします。返信は必ずしたいと思つてないので、本当にお願ひします。

それではこれからも応援宜しくお願ひ致します。

番外篇 人物紹介（後書き）

人物紹介でした。全員分載があるので、ぜひ読んでみてください。何度も書きましたが、感想がとっても欲しいです。どんな事でも構いません。誰かの番外編を書いてと言ってくださいれば書きますし、こうした方が良いと言われれば出来るだけ修正しますし、なので皆さんお願いします。

この作品も本当にたくさんの方に読んでもらっています。とても読みになっています。皆さんの期待を裏切らないようにこれからも頑張るので応援宜しくお願ひします。

第壹話 神鳴流の実力（前編）

強さを求める旅を始めた龍騎であつたが、なかなか強敵と会えず

退屈な旅となつていた。「いい加減骨のある奴を斬りたいよ・・・」

思わず愚痴をこぼす龍騎であつたが道中の村人からある情報を得ていたのである。

「ここには『死神』が出てよく旅人を斬るあんたも氣をつけな」

「死神」がいると言つ事だけで、詳しいことは何も分かつていながらそれでも

龍騎の強者への乾きを癒すには十分であった。「その『死神』さんとやらは俺が斬る！」

そう意気込む龍騎であつたが中々お目当ての「死神」には会えず、退屈な旅となつていた。

結局誰とも会わないまま夜を迎えたある日、遠くから大きな悲鳴が聞こえ、龍騎は

声の方向へと走つていった。そこには人が横腹を真つ二つにされ血が吹き出している、

見るも無残な死体が転がっていた。「これは「死神」の仕業か?」と独語した龍騎の

背後に強烈な「殺氣」を感じた龍騎は即座に後ろを向いた。そこには血らしき物が付いた

武器「鎌」を持つた男が龍騎を見るなり鎌を振り龍騎を殺そうとしていた。

「あんたが例の「死神」か!」その龍騎の声」と切り裂くように男は鎌を振り攻めて来た。

「所詮鎌は大多数相手の武器一対一ではどう考へても俺の刀に分がある」そう独語し龍騎は

刀を腰から抜き反撃に出た。鎌の攻撃を刀でいなし隙だらけの腹を斬りつとした龍騎の策は

鎌を自分の前で回転させる「墮天流奥義 死神の爪・・・

」なる技によつて防がれ不発に

あんた名前は?」そう尋ねる龍騎

にあくまで冷酷に男は鎌を振るつた。無視かよーと叫ぶ声も気にせず男は前方に跳ぶ力を

利用し龍騎を裂こうとしたが、龍騎の素早いバックステップによつて回避された。

「それが堕天流ね、だつたら今度は神鳴流の力見せてやるよ」と言い放った龍騎はすでに

その場にはいなかつた。ジグザグに男へと接近した龍騎の眼は、殺氣で満ち溢れていた。

ジグザグの軌道から急に飛び出したかと思えば神速の速さの居合をぶつけるところだつた。

「神鳴流奥義 花瓣！」と叫び繰り出されたこの技はず刀を抜く動作から

攻撃だつた。居合で抜かれた刀の柄の部分で男のみぞおちを突き刺し、ひるんだ男の

頭上まで刀を振り上げると、一気に刀を振り下ろし男を切り裂いた。男は素早い動きで

後退しようとしたが、腹に柄を刺されたせいで一瞬動きが鈍り腹を斬られ血が吹き出ていた

「どうした？もう終わりか？「死神」はこんなもんか？」と挑発する龍騎に対し男は自分の

血を鎌に塗り鎌からは血が滴り落ちていた。「俺の名は桐生、俺を斬るとは中々の腕だ、

だが俺は殺せない！」そう一喝してこちらを睨みつけた。

桐生は鎌を伸ばし自分の身長の

三倍はある鎌にまで変化させた「俺の鎌の名は血塊鎌、
堕天流に伝わりし

伸縮自在のこの鎌にて貴様を切り裂く！」それを聞いた
龍騎は怯むどころか刀を握り締め

笑顔を浮かべていた。「俺の名は龍騎、神鳴流最強にな
るため、「武神」に

なるためにあんたを斬る！」と力強く叫んだ。両者は同
時に互いの武器を振るつた・・・

第3話 神鳴流の実力（後編）（前書き）

「死神」桐生との対決中である龍騎。両者限界が近いなか、新たな奥義で桐生を倒すことが出来るのか？

第武話 神鳴流の実力（後編）

「死神」と呼ばれる鎌使い堕天流桐生との命を削るような戦いが続く中、同時に龍騎はこの戦いに楽しさを覚えていた。それは強くなるために旅に出て初めての大物であったからである。桐生の伸縮自在の鎌「血塊鎌」が龍騎を抉ろうと、牙を剥いた。普段中々来ない横からの抉るような攻撃は、かわしきれずに生々しい傷跡を龍騎に残していく。

「やっぱあんた強いよね、会えて良かつたよ。」

龍騎が素直に桐生の武を褒める。桐生が血塊鎌を限界まで伸ばし、龍騎の攻撃を防ぎながら全力の一振りを決める。龍騎は怯むことなく、前に進んだ。その一振りさえ見切れば勝てると見込んでの突進だった。しかし、この攻撃は全て罠であるということには気づけなかつた。桐生が吼える。

「墮天流奥義 鎌鼬！」

急激に鎌を縮めそのまま高速で一回転し龍騎が「神鳴流奥義 花瓣」で切り裂いたのと、同じように腹を切り裂いた。

「クソッタレが、俺が付けたのと同じ傷を付けやがったな？」

腹から血が滴り落ちる、しかしそれは桐生とて同じ事であった。両者出血が止まらないのである。龍騎もこうなつてしまつては楽しむ余裕も無い。

「もうちょいあんたと戦いたかったけどこのままじゃこんな所で何も出来ずに死ぬ。」

強くもなれず、武神にもなれず。こんな所で死ねる龍騎ではない。

一度刀を鞘に戻し、居合の構えを取る龍騎。それに反応し鎌を縮めた桐生。桐生目がけて加速する龍騎。防御にでるかと思われた桐生も鎌を龍騎に届く範囲まで伸ばし龍騎の刀に仕事をさせる前に決めつもありであった。それを見た龍騎は桐生に届く前に刀を抜き鎌を

いなしながら前進する。滑らせながら迫つてくる刀に桐生は呆然となつた。

「神鳴流奥義 翠蓮！こいつで決める！」

大きく真一文字に刀を振るつたが、これは虚空を斬るだけになつてしまつた。桐生の素早いバックステップでかわされた。しかし、鎌鼬で罠にかけられたように今度は龍騎が罠を仕掛けた。龍騎はわざと外したのである。この動作が翠蓮の始まりであつた。振り切つた刀を持ち替え今とは真逆の軌道で刀を振るう。しかし、桐生はすでに横切りの届く範囲にはいなかつた。桐生はこの「翠蓮」をかわし、次の一撃で龍騎の首を取るつもりであつた。しかしその計画は無意味であつた横切りの流れであつたはずの刀の動きが「突き」に変わつたのである。花瓣で切り裂いた傷跡に突き刺された桐生には立ち上がる氣力は残されてはいなかつた。横から縦へ。これが神鳴流奥義の一つ翠蓮である。この瞬間勝敗は決した。勝つたのは龍騎。しかし、龍騎もまた、腹を斬られていて限界を迎えていた。急いで止血をする。

「墮天流の「死神」桐生 中々強い奴だつた・・・」
強敵との戦いが終わつた開放感と、また一つ「武神」に近づいたといつ満足感に龍騎は包まれていた。

第3話 神鳴流の実力（後編）（後書き）

今回で桐生戦は終わりです。今回と前回で文章表現がまるで違うのは、未だに書き方が定まらないからです。ようやく落ち着いてきたのでやっと読みやすい作品になつたと思います。これからも精進するので皆さんよろしくお願いします。

第参話 刀対槍

堕天流の桐生との傷も癒えきらないまま、龍騎はとある城を目指していた。その城は建国10年と出来て間もない新興国ではあるが、強い武を求め世界各国から強い流派を求めて続いている。ここなら極限の戦いが出来ると考えた龍騎は城を目指し歩き続けていた。城までの距離はそう遠くなくもうかすかに城は見えていた。「今あの城で一番強い流派は槍の「明仁流」古くから伝わる名門か・・・」明仁流ははるか昔の戦乱で一騎当千の戦力があったと言われていており、武神候補も何人か居る。しかしここを超えなければ武神などにはなれはない。城についた龍騎は迷わず道場に行き迷うこと無く強く言つた。「頭首は誰？俺と闘つてくれない？」明仁流にとつての久々の挑戦者に周りからは笑い声が聞こえる。「頭首は俺だが・・・」とやる気がなさそうに出てきた一人の青年。「この俺、明仁流と戦うの？」あきらかに馬鹿にしたような声で、龍騎を煽る。「俺とじや嫌？」龍騎も全く物怖じせずに強く言つた。「だつたら少し遊んでやる。命の保証はないがなつ！奥に来いそこで仕合をする。」青年は先に奥の広間へといつた。龍騎も後を追う。民も観戦に訪れている。「俺は明仁流の八雲、貴様の名前は？」八雲が問う。「俺は、神鳴流の龍騎。」これだけ言えば一人には十分である。八雲は槍を、龍騎は刀を抜く。先に踏み込んだのは龍騎、一気に間を詰める。八雲は刀が届く以前の距離から、龍騎を刺しに行く。ちつと龍騎は舌を鳴らした。槍の利点はその長いリー・チにある。相手が届くより先に攻撃し敵に何もさせないまま、敵を貫く。これが槍の強さであり、明仁流がかつて一騎当千の力を持つていた理由である。全く攻められない龍騎をあざ笑うかのように、八雲の攻めは続く。「明仁流奥義 旋風踏込斬！」八雲は勢い良く斜め前方に出たかと思うと、龍騎の上から、槍を刀のように横薙ぎで振るつてきた。横にも

避けきれないし、後ろにも、リーチがある。ここは後ろに下がつて軌道を刀でずらすべき、と思った龍騎であつたがハ雲の腕はその予想を遙かに超えていた。振りの途中で急激に加速して迫ってきた槍。龍騎も下がりはしたが腹を裂かれ、血が滴り落ちる。龍騎はジグザグに動き的を絞らせないつもりであつたがハ雲は冷静に龍騎の動きを読み、たたき潰した。「こいつ相手じゃ花瓣も翠蓮も使えはしない、こうなつたら……」こう独語する龍騎ではあるが、ハ雲はいたつて冷静に己が槍を振るつてきた。「明仁流奥義 神速五月雨突！」槍を突きながらこちらに突進してくるハ雲。後ろに下がるが壁が迫つて、逃げようがなくなる。そうなる前に横に動いた龍騎であったがそれが間違いであった。「明仁流奥義 旋風踏込斬！」高速の突きから横祓いへと変化した、ハ雲の槍。さつきとは違いモロに食らつたため血が噴き出してきた。「このままだと俺は本当に死ぬ、こうなつたらあの奥義を決めるしか無い」覚悟を決めた龍騎は一気にハ雲へ突進を見せるが「明仁流奥義 神速五月雨突」で弾かれそうになる。しかしさつきとは違ひ槍をかいくぐりながら、少しづつ距離を埋めていく。危険を感じたハ雲は旋風踏込斬で龍騎を吹き飛ばそうとしたが龍騎はこれすら潜つて躲すようやく龍騎の距離になつた。槍の弱点は潜り込まれた時の対処が難しいことにある。ハ雲はこの弱点を埋めるために刀身を短く持ち直して槍を振るう。「俺のあの奥義は奇襲用の一発技、外せば終わりだが槍相手なら決まれば俺の勝ちだ。」懐まで近づき龍騎が勝負を決めに行く。「神鳴流奥義・・・」言い終わらないまま正面から龍騎の姿が消える。しかしハ雲は見切つていた。敵が左に高速移動したことを。槍を左に振る。しかし槍には切つた感触がない。「後ろかつ！」背後へ槍を下げるがここにも感触がない。完全に龍騎を見失ったのである。一瞬ではあるが戦いにおいて一瞬敵を見失うのは死を意味する。その時上から何か液体が落ちてきた。それは血であつた。そして上には・・・龍騎が舞つていたのである。そのまま斬りかかるがハ雲が槍を突き上げ、龍騎を撃ち落そうとする。「・・・見えたっ！」神憑り

的戦闘能力によつてハ雲の槍に龍騎は両足を載せた。これで、ハ雲は槍を振るえない。勝負は決まつた。重さで槍が地面につく瞬間、「虚蝉！」呴哮しながらハ雲の上半身から左足までを一気に切り裂く。ハ雲が地面に倒れ龍騎は刀をしまい傷を確認する。深いが何とかなりそうだ。「これが神鳴流奥義 虚蝉、相手にとつて見るとの出来ない技！」虚蝉は高速で敵の横から後ろまで回り込み、空中から敵を切り裂く大技である。かなりの身体能力が必要ではあるが、決まれば躰されることはずない。見切り不可能の秘技それが虚蝉。そして言い終えた龍騎も地面に崩れる。疲労で立てなくなっているのである、しかし龍騎には勝つた充実感から笑顔がこぼれていた。

第肆話 武神戦開幕（前書き）

明仁流の八雲も無事に打ち倒した龍騎。自信をつけた龍騎は武神のいる武神殿に行き、武神と戦つことを決意する

第肆話 武神戦開幕

明仁流のハ雲を倒したことにより自分の剣に搖ぎ無い自信を得た龍騎は、ついに今の武神と戦うことを決意し、世界一の決闘場「武神殿」へ向かい武神と戦うことを決意した。

「今の武神って誰だつけ？よく憶えてないんだ。」ハ雲が尋ねる、ハ雲は龍騎に虚蟬を食らつたものの芯は外されており、傷は負つたが命に別状はない。

「今の武神は・・・おそらく負けてなければ俺の・・・兄だ」龍騎が声を低くして語る。

「そういえばそうだつたかもしねり、けどあの人確かに二刀流じやなかつたか？お前は一刀流なのに、何が違うんだ？」ハ雲が尋ねる。「あいつは、神鳴流の奥義を全て会得した。その結果あいつは神鳴流には限界があると言つて家を出て行きその結果あいつは神鳴の剣を二つの刀で振るうことこそ最強・・・と考えあいつは神鳴を越えたと語り、流派 神鳴二刀流を創り上げた。その結果あいつは、誰よりも強くなり、武神になつたんだ・・・」龍騎が憎しみを込めたような口調で喋り始める。

「何でそこまで怒るんだ？お前の兄さんは、そつちの方が強いと思つてそうしたんだろう？そしてしつかり結果に表した、それも武神という結果でな。嬉しくないのか？」ハ雲が尋ねるハ雲には何故そこまで、龍騎が怒るのか理解できなかつた。

「あいつは！俺達を利用して上に上がつた。あいつは神鳴流の次期頭首だったのに！俺だって、あいつのことを尊敬してた。本気で敬つてた！そんな人の気持も知らずに俺達から離れて、強くなつて、武神になつた。そんなの許せるかよ！」龍騎が激昂する。そして龍騎は言葉を続けた。

「だからあいつはこの俺が！神鳴流の俺が斬らなくちゃいけない。

そしてあいつに分からせるんだ神鳴流の強さを！そのために俺はこの剣の道を歩んできたんだ！負ける訳には行かないっ！」龍騎の強い覚悟に押され、八雲に戦慄が走った。

「そうか、なら勝つてこい但し……気をつけろよ、相手は武神なんだからなそして……俺以外の奴に負けるなよ。」こうして龍騎は武神殿に旅立つていった。

数日後－武神殿

「今日もこの武神殿に新たな挑戦者がやつて参りました！本日の挑戦者は～現在の武神の弟、最強の流派と謳われたあの神鳴流の剣を受け継いだ天才、大神 龍騎です！！！」ナレーターの威勢のいいアナウンスで場内に入場した龍騎。何度も大会で優勝もしているので、知名度は高く観客席からは盛大な拍手を受け入場した。

「対する武神は～武神になつてからの試合で、傷ひとつ受けずに勝ち続けているこれまた天才、神鳴流の剣と独自の剣が相まって出来た流派 神鳴二刀流の～大神 煌輝です！！！」場内が大歓声に搖れる。驚異的な強さと、カリスマ性を持つことからファンも多いらしい。しかしそんなことはどうでもよかつた。龍騎に取つてこの試合は、煌輝を殺せさえすればそれでいいのだから。

「龍騎、お前もここまでこれたか。だが俺は神鳴の太刀筋を全て理解している。お前に勝ち目はないどうだ？諦めて俺のもとで二刀流にならぬいか？」二刀流はお前に別次元の強さをもたらす。どうする？」

煌輝の煽りに龍騎は乗るわけがなかつた

「俺は、あんたにこの神鳴流の強さを教えるためだけにここにいる。二刀流にする必要なんてない。俺はお前を斬る。それだけだ」冷たく言い放つた龍騎。

「話を聞かない弟には躰が必要だね、面倒だけど……殺すよ」煌輝から冷気のようなものが出ている気がした。しかし怯むわけにはいかない。アナウンサーの試合開始の合図がなる

「それでは、武神決定戦の開幕です！！」言い終わつたときには刀

のぶつかる音がした。まず飛び込んだのは龍騎。それをいなす形で煌輝も刀を抜いた。正面で一度刀を当てた後、上空に舞う龍騎。そこから斬りかかるも、さつきとは違うもう一方の刀で対応する煌輝。背面から斬ろうとするも、煌輝に弾かれ無意味となつた。しかしこで攻めないわけにはいかない。怒涛の猛攻を見せていた。後ろに飛ばされるも、その反動で煌輝に向け加速し突っ込む龍騎。煌輝は一旦上に跳躍し、横へと弾き飛ばした。叩き付けられる前に床を受身の姿勢で転がり、立ち上がったときには煌輝に向かつて斬りかかっていた。二人とも一疾すぎる。観客の誰もがその動きに追いついていない。今も、飛びかかった龍騎に回りこんで、刀を振るう煌輝だつたがそこには、龍騎はいない。後ろを見せていた龍騎が回転斬りで煌輝に迫る。刀を止め、防ぐ煌輝だつたが刀の勢いは完全に龍騎にあり徐々に煌輝の刀が押し込まれている。しかし、彼は一刀流。空いている剣で龍騎の右手を斬り下ろしに行く。慌てて刀を引っ込め後ろに下がつて行つた龍騎。この戦いは、そう簡単には終わらない。そう思わせる最初の攻防であつた。

「息もつかせぬ展開の今回の武神決定戦、白熱の勝負はまだまだ続きそうですっ！」アナウンサーの実況にも熱がこもつてているような気がした。ここで龍騎に不安なことがある。それはこちら側の全力の攻めにまだあいつは余裕を持っているということ。ほとんど一本の刀でここまで戦つてることである。やはり、あいつは強い。だけど負ける訳にはいかない。龍騎はもう一度煌輝へ踏み込んだ。

第肆話 武神戦開幕（後書き）

強引な流れですが早くも、武神である兄、煌輝との決戦です。毎度毎度読みづらい文章構成で本当に申し訳ないと思っております。そろそろ皆さんのような小説を書きたいなーと思つてこの頃、皆さんぜひ応援宜しくお願ひ致します

第御話 激戦（前書き）

兄との死闘を続ける龍騎、
満身創痍の中神鳴流の奥義は炸裂するの
だろ？

一進一退の攻防が続く龍騎対煌輝。命を削る戦いはあるが、煌輝からは明らかに余裕が感じられた。死に物狂いで攻める龍騎に対し二刀流の利点を生かし、全てをいなす煌輝。誰の目から見ても、煌輝が勝つと確信していた。龍騎が一度煌輝に背を見せてから、遠心力で加速する刀を回転斬りでぶつけてきた。今まさに切つ先が煌輝に当たるその瞬間——片方の手でいなしながら自分も回転し、もう片方の刀で・・・・・龍騎の背中を真一文字に切り裂いた。がはつと痛みに耐え切れなかつた龍騎が声を漏らす。一旦間をおこうとした龍騎に煌輝の追撃が迫る。今度は縦に引き裂かれた。龍騎の背中に十字架のような傷ができる。

「お前の大好きな神鳴流はそんなもんか？俺にお前は傷ひとつ付けてさえいないぞ？」

「五月蠅い、あんたは必ず斬る、少し・・・・・黙つてろつ！」

龍騎の怒声が飛ぶ。それに反応してか煌輝は一直線に龍騎へ向かって加速した。

「お前に刻みこんでやる、俺の神鳴二刀流を！ 神鳴二刀流奥義
憐花！」

二つの刀を構え迫つてくる、煌輝。龍騎もこのまま斬られるわけにはいかない。煌輝の最初の攻撃は、下段、足元への横切りだつた。これを刀で止める龍騎。しかし上段ががら空きである。刀を戾そうとした龍騎だつたが気づいた頃にはもう遅かった。刀を押さえられ防御に出れない龍騎に煌輝がもう一方の刀で斬りかかる。これで終わりか——誰もがそう思った瞬間龍騎は煌輝の腹を蹴り、刀が心臓にまで届かないように、スペースを作つた。しかしそれで防げたわけではない。煌輝の刃が心臓をかする。全身から嫌な感じの汗が出

た。何とか刀を振りほどいた、龍騎だったが煌輝はすでに下がっており、とても追撃を加えるような距離ではなかつた。そして龍騎の身体も追撃を加える元気は無かつた。

「煌輝選手の圧巻の一撃！また掠り傷一つ受けずに相手を潰すのかつ！」

アナウンサーの声にも熱が入る。立つてゐるのも辛くなつてきた。悔しいがこのままだと何も出来ずに龍騎は死ぬことになる。兄をこの手で倒すと誓つたのに・・・・・・

「どうにかしてあいつを倒さなきや、何か使える奥義は・・・・・・」

龍騎が考える。花瓣は隙が大きく腕を斬られそうなので使わない、翠蓮も同じ。そう考へてる間も煌輝の攻めは続く。今度は、龍騎が防御の立場に回つた。圧倒的劣勢である。ここで虚蝉も思いついたがあの一つよりも隙が大きく、神鳴流の奥義を分かつてゐる煌輝には返り討ちに合うだけと考えた龍騎は虚蝉も諦めた。

「どれを使つても決まりはしない、むしろその大きな隙で俺が死ぬ。他に使える奥義は何か無いのか？他の神鳴流の奥義は・・・・・・煌輝との打ち合いの中、それを考へていた龍騎だが考えながら相手を出来るほど煌輝は甘くない。徐々に顔が、身体が、斬られていく。出血も多くなってきた。

「なあ、そろそろ決めてもいいか？俺も暇じゃないんでね」

勝利を確信して煌輝が龍騎を挑発する。しかしそんな声は龍騎の耳には届いていなかつた。煌輝が今までにない振りの大きい攻めを見せてくる。龍騎の得意な空中での回転斬りを見せてきた

「これでーー終わりだ、お前の命俺が頂く！」

回転斬りを半歩下がり刀を当て躱す。だがもう一方の刀の恐怖は終わつていなかつた。振り上げた刀は大きな袈裟斬りで龍騎を狙う。そのまま当たればそこはーー心臓があつた。死は免れない。刀を弾いたということは龍騎の刀も使えないということである。がら空きの龍騎が見えていた。彼は消えたのだ。正確には消えるほど早く、

沈んでいた」。しかし袈裟斬りは直に当たる。切つ先が近づいたその時——溜めた膝のバネで龍騎は煌輝の目の前まで急加速、そしてその勢いを下から上えの斬撃に転換した。

「これが、神鳴流だつ！！」

龍騎の咆哮とともに煌輝から大量の血飛沫。この戦いをひっくり返すほどの威力であった。煌輝もこれ以上の追撃を回避するため刀を振るつたので、龍騎は一旦距離を置いた。

「神鳴流奥義 麒麟か！小瀕な真似を……」

動搖の声が煌輝から聞こえた。ついさっきまで死にぞこないのだった弟からこれほどまでに強烈な一撃を浴びるとは予想外だったであろう。会場からも歓声が上がる。

「お前は覚えているだろ？ 神鳴流奥義 麒麟さ、俺の返し技は痛かつたか？」

さつきとは違ひ龍騎が煌輝を挑発する。麒麟とは伝説の獣であり、殺生を嫌う生き物。だからこの技は心臓とは反対を斬るようになつていて、そう教えられている。技の原理としては、敵の攻撃を身体から力を抜き、重力の力でかわし、その勢いと自分の脚力を合わせることで瞬間に相手のもとへ詰め寄り、隙の出来ている身体へ斬撃を叩き込む技である。隙は少ないが、動きが遅れればそのまま死ぬというリスクの大きい技だがここ一番で龍騎はやつてのけた。これで自分にも勝ち目があることを確信する。逆に煌輝は一筋縄では行かない事を痛感した。

「まさかの龍騎選手の反撃——この勝負どちらに軍配が上がるのか全く予想がつきませんっ！」

そしてこの勝負の決着は徐々に近づいていた——

第4話 激戦（後書き）

あと2話程で終わるだらうこの作品。もし全部読んでる方が居たら本当にありがとうございます。小説にすりなつてなかつた第3話と比べるとだんだんマシになつてきましたと思ひます。皆わん讀んでくだせつたらぜひ、レビューをお願いしますね。

第碌話 終局（前書き）

闘いの終わりが近づいてきた二人。最後に立っているのは果たしてどちらなのか、激闘に幕が閉じる——

神鳴の返し技「麒麟」を発動させ、形成を逆転までは行かないが、追いつき勝負を振り出しに戻した龍騎、だからといって彼に余裕が出来るわけでもない。そして煌輝もまた余裕が無くなり命の危機に晒されることとなつた。一人とも立つてることさえ辛い。しかしどちらも負ける訳には行かなかつた。龍騎は流派の誇りのために。煌輝は自分の創り上げた流派の強さを知らしめる為に。今までとは違い、先に動いたのは煌輝だつた。逆刃で持つた刀でまずは下段、足を狙う。龍騎は刀を当てたあと、後ろへ大きく跳んだ。距離を取るためである。煌輝もそれで攻め手を緩めず追撃に走つた。煌輝が普段とは違うおかしな構えを取る。それはまるで刀を投げる様な構えであつた。当然ながら刀は投げて使うような武器ではない。刃が纖細ですぐ壊れてしまうし、そもそも弾かれては貴重な武器を失う。これでは全く意味が無い。

「刀を投げるわけがない、これはハツタリだろ？」

そう独語する龍騎。しかしこの大事な局面でハツタリをするような煌輝ではない。あり得ないことが龍騎の目の前で起こつた。そしてこれは煌輝が本気を出した瞬間でもあつた。

「まさかこれまで出すなんてな、褒めてやるだがこれでさよならだ！」

神鳴二刀流奥義 かげろう陽炎つ！！」

煌輝は、上半身を後ろへ捻つたあと、右手の刀を龍騎目がけて本当に投げてきた。動搖を隠せない龍騎だが、刀で何とか弾く。弾かれた刀は上空へ上がつた、その刀目がけて煌輝が跳ぶ。その際には左手の刀で龍騎を狙う、何とか防いだがそこからの煌輝の攻撃は疾く、そして何より、強かつた。左手で斬り終えた時、すでに右手には刀を握り締めていた。左の攻撃が終わり一息付けるかと思つたその瞬

間——右手での袈裟斬りが入った。左目の横から、鼻筋、口元、そのまま腹までを切り裂くとも大きな袈裟斬りだった。着地した時煌輝は左手の刀で突きを繰り出す。しかしこのままやられるわけにも行かない。先程の返し技を放つ。

「神鳴流奥義・・・・・・ 麒麟！」

身体を一気に沈めてその勢いを利用して敵を斬る返し技。しかし一度喰らつた技をなんども喰らうような煌輝ではない。攻撃を仕掛けてくる下段に刀を置いておき、龍騎の麒麟を防ぐ。勢いのある龍騎の刀の方が鍔迫り合いを制すところだったが、煌輝はすでに後ろに下がり麒麟は不発に終わった。

「まだやるのか？これ以上は本当に死ぬぞ？」

煌輝の声が聞こえる。左目から入ったため、心臓には当たっていないが、致命傷である。意識が朦朧として来た。煌輝の姿が霞んで見える。もう限界なのかもしれない。龍騎の意識に「諦め」という言葉が浮かぶ。ここまで自分を磨いてきたのは煌輝を殺すため。しかし兄との実力の差は圧倒的であった。いまの煌輝の奥義 陽炎は全く手も足も出なかつた。ここで床に倒れたら全て楽になる、そう思つたその時——

「もう限界か？昔のお前はもつと強い心があつたのに今のお前はそんなんもんか？」

それじゃあ俺ひとり殺せないぞ？」

煌輝の声が聞こえる。お陰で目が覚めた。目の焦点にしっかりと煌輝を定める。戦うという強い意識を取り戻したもの的身体の限界は近く、そろそろ決めなければ危ない。自分の刀を、今までの鍛錬を、兄への想いを、神鳴への想いを、そして——龍騎の想いをこの一撃に託す。その覚悟で刀を強く、強く握りしめた。

「これで終りにする、俺が今までの人生で刻みつけてきた想いの全てを、この一撃に！！！」

力強い咆哮のあと一度刀を鞘に収める。抜刀術で勝負を決めるつもりだ。勢い良く龍騎が煌輝に向け加速する。今までで、最も疾い速

度であつた。煌輝の横切りに、龍騎は身体を沈めることで答えた。

最初は返し技で攻める。

「神鳴流奥義 肄の型 麒麟！！」

驚異的なキレで、煌輝の懷まで潜る。疾きこそ、龍騎の持ち味であった。煌輝は一方の刀で受け止めながら後方へ跳ぶ。一寸間を置く為だ。しかしそれを許さないかの様に龍騎の攻めは続く。

「神鳴流奥義 壱の型 花瓣！！」

刀の柄の部分を腹に押し込み体勢を崩したところで、上段からの斬りを入れる技。それでも神鳴流の全ての技を理解している煌輝には、その次が分かる。煌輝は、自分の刀で龍騎の刀の柄をすらしながら、龍騎に向かつて突きを繰り出す。龍騎は避けるも顔の横をかすめて血がでる。だが今の龍騎にはこんなささいな傷どうでも良かった。要は煌輝の命を奪えればいい。ただそれだけである。柄を腹に指す直前、龍騎の刀は予想外の動きをした。柄は横を向きここで刀は抜刀された。龍騎が攻めのリズムを変えた瞬間である。

「神鳴流奥義 弐の型 翠蓮！！」

一度手前で空振りした後、刀を持ち替え、腹の手前で斬りの動作から突きに移項する、流れるような技。さらに突きの際龍騎は地面を踏み込み、加速した突きを見せる。ここで今度は煌輝が予想外の動きをした。それはまるで麒麟のような動きを――

「神鳴二刀流奥義 水蛇！！」

一度龍騎の刃の真下まで沈みそこから翠蓮の突きを弾くつもりだった。しかし振り上げた先に剣はなく一虚しく虚空を斬るだけであつた。龍騎は完全に正面から消えた。煌輝はこの事實を身体が理解する前に、本能でこの事實に対処しようとした。無意識に自分の身体の両脇に刀を振る。そしてその後に、この技を理解する。神鳴流奥義 虚蟬龍騎の一番の得意技にしてこの技は――煌輝が龍騎に伝えた技であつた。両脇を斬つてもそこに龍騎の姿は感じられなかつたので今度は一方の刀で自分の背後を、もう一方の刀で自分の上空を斬つた。これなら必ず当たるそう睨んだ。そしてその予想は的中し

た。龍騎は自分の上空に浮かんでいて、首筋を横切りしそうなそんな構えであった。先に上空に置いといた刀で龍騎の刀を防ぐ姿勢をとりながら煌輝自身は後ろへ下がりながら、もう一方の刀も龍騎に向ける。上空では地面の様な動きは出来ない。その間に斬るつもりだった。

「残念だつたな！お前の得意な神鳴流奥義 參の型 虚蟬は確かに疾い。だがこうやってお前の姿を捉えればこんな技無意味！これでサヨナラだ、龍騎！」

確かにこの距離なら横切りも突きも届きそうにはない。しかしこの距離を埋める方法を龍騎はこの闘いの中で見つけていた。そしてそれは今の龍騎の必殺必中の技となつた。龍騎が吠える。

「神鳴流奥義 極の型 虚陽きわむつうつかげ！！！」

龍騎はこの距離の差を兄、煌輝の陽炎の様に刀を投げることで埋めた。一刀の刀の間を縫うようにして龍騎の刀が煌輝へ羽撃く。その刀は——煌輝の横腹を貫き煌輝は地に倒れた。龍騎が痛みをこらえて何とか立ち続ける。龍騎も陽炎の傷が激しく勝ったという実感が沸かない。そしてどうしても煌輝に聞きたいことがあつた。

「どうして、神鳴から離れたんだ？・・・・兄さん」

煌輝が何とか口を開け答えようとする。

「俺の・・・全て・・・を・・・話す・・・時が・・・来た・・・龍騎・・・よく聽け・・・」

兄は全てを、弟は全てを聞く覚悟を決めた。そしてこれが最後の一
一兄弟が話す刻となつた。

第碌話 終局（後書き）

今回で、煌輝戦はお終いです。僕が書いてきた中では一番の物となつたと思います！次回はエピローグの予定なので早いですがそろそろこの作品にも幕を閉じようかなーと思っておりましたが、ここに来てこの作品に愛着が出てきました。どうしようまだ続けようかな

第七話 結末（前書き）

神鳴流奥義極の型　虚陽で薄氷の勝利を掴んだ龍騎。　兄・煌輝は全てを話す決意を固めた——

第七話 結末

「どうして、神鳴二刀流なんて流派を作つたんだ？兄さん……」尋ねる龍騎だが、こちらも身体は限界だった。今は何とか持ちこたえている。

「神鳴……二刀流の……意味は……神鳴を超えた流派を敢えて作り……その流派を超える事で……神鳴を、お前を最強の……流派にするため……」

煌輝は口を必死に動かして語り始めた。神鳴二刀流の存在意義とは、煌輝の名誉の為ではなく、弟・龍騎と自分の大好きな一族、流派神鳴流の為であったのだ。

「じゃあ兄さんは神鳴を裏切つたんじゃなくて、神鳴のために俺の為に神鳴を離れた……」

「ああ……そうだ。俺は・お前に強くなつて欲しかつた・・・お前は俺の願い通りに・・・強くなつてくれたよ・・・」

兄の顔に笑みが見えた。動搖を隠せない龍騎。手が震えて刀が落ちる。

「この闘いも、今まで斬りかかってきたのも、全て・・・演技？」
「そう、お前が・・俺への想いの強さで・・・強くなるためにだ…
・許せ龍騎・・・」

龍騎の目から零れ落ちた零はいつしか涙となり龍騎の両目から止まることが無く流れしていく。

「・・・お前は・・神明で一番強い・・父上よりも・・叔父上よりも・・・お前の最後に編み出した・・神鳴流奥義極の型 虚陽。あれは、良かつた・・・」

龍騎から零れ落ちた零はいつしか涙となり龍騎の両目から止まること無く流れしていく。

「あの技は・・兄さんの陽炎を真似しただけ・・・兄さんがいなけ

ればあんな技一生創れなかつた・・兄さんのお陰。だから兄さんの技陽炎と、兄さんが俺に教えてくれた神鳴の技虚蟬の名をとつて・・

・「虚陽」と名付けたんだ・・・

龍騎があの技に込めたのは力でも技でもなく、兄を尊敬し、神鳴流を愛し、そして兄を想う心――

「俺の・・陽炎と神鳴を融合させるなんてな・・・お前は・・・凄いよ」

言い終わつた途端、煌輝から血がぐる。吐血していた。徐々に煌輝から力が抜けてきている気がした。

「兄さん、未だ死はないで！俺はもつとたくさん兄さんに技を教わりたいんだ！兄さんに教えてもらいたいんだ！だから・・・兄さんっ！」

龍騎が必死で叫ぶ。想いは同じだつたのに、すれ違ひ続けた二人。ようやく重なつた想いなのに――

「・・お前は、もう強い・・・これからは更に高みを目指せ・・・まだ神鳴には奥義が残されている。強くなれ。お前が・・武神になる今――お前は様々な流・・派の人間と戦う・・はず・・だ。龍騎・・俺は・・お前をずっと想つていた・・・俺は・・何時までもお・前を見守つている・・・俺の弟なら・・・神鳴の子なら・・最・・後ま・で負ける・・・な」

煌輝の動きが――止まつた。龍騎には世界さえ止まつた気がした。「そんな、兄さん？ 眠つただけでしょ？ またすぐ目を覚ますんでしょう？ 兄さん・・・返事をして？」

無駄だと頭では分かつていても心の部分がそれを否定する。煌輝が死んだという事実を――

「これで、死んじやうの？ 兄さん、目を・・・覚まして・・・」
心も事実を理解する。そして龍騎は哀しみに飲まれた。

「もう一回だけ・・・笑つてよ・・兄さんっ！―兄さ―――ん！――」

二人が戦うときには晴れていた空が、徐々に曇り――煌輝が死んだ

のと同時に大雨が降り注いだ——それはまるで、龍騎の心を——すれ違い続けた二人を慰めるような——そんな雨だつた——

——1週間後——

「新しい武神がここに決まりました！無敵と謳われた天才・神鳴二刀流の大神 煌輝を破り、新たな武神の座に着いたのは若き天才！前武神の弟で、新たな天才・神鳴流の——大神 龍騎ですっ！！」実況の熱のこもった声の中龍騎が武神殿に入場した。しかしその顔には笑顔がない。その龍騎が周りからの質問に答える。

「これからは、ここ武神殿に居るだけではなく、様々な地方を旅しながら、新たな強敵と闘つていきたいと考えています。これまでの武神に失礼の無いように。そして——尊敬する兄と神鳴流の名に恥じないような武神を目指していくので皆さんよろしくお願ひします！」

こうして新たな武神は龍騎が務めることとなつた。そして宣言通りその日の夜早速旅準備を終えて、新たな敵を求めて武神殿を後にした。

「俺、兄さんよりも強くなつて必ず兄さんの想いに答えてみせるから。だから安心して見てて——」

今、龍騎の腰には三本の刀が収められている。今まで龍騎が愛用していた刀「龍鳴」の他、兄、煌輝の刀の「桜花」と「蓮華」があつた。龍騎はこれまでと同じく、一刀流で敵に挑むつもりだ。けれどこの一本は兄の想いを感じるために持つことにした。龍騎は武神殿に背を向け、新たな覚悟と想いを背に、歩き始めた——

第七話 結末（後書き）

今回で煌輝戦は本当にお終いです。これと同時に武神になつたので、第壹部の「武神激闘編」も簡潔です。後日番外編や、過去編、煌輝が主役のお話でも書こうかなとも思つてあります。

まずは次回からの第貳部「龍騎神話編」を書こうと思つております。第貳部は今までと同じようにバトルがメインですがこの物語に足りない要素も足そろかなーと思っております。題名の神話は龍騎が神話の様に語り継がれるほどの活躍をさせるつもりなのでこの題にしました。煌輝の想いを受けて戦う龍騎をこれからもよろしくお願いします！

最後に、最近アクセス解析を見ると、何百人の方々にこの小説を見てくださっていることがわかりました。本当にありがとうございます。そしてこれからも応援宜しくお願ひします、では長文で失礼ですが、第貳部でお会いしましょー！

第八話 新たなる戦い（前書き）

今よりも強くなるために旅に出た武神の龍騎。それと同時に新たな
武神の報は世界中を駆け巡つた——

第八話 新たなる戦い

強くなるために新天地へと船に乗つて旅立つて行つた龍騎は到着早々何人かの山賊に襲われるも、何ら問題なく山賊を倒し、武芸者を探して旅を続けていたが、近くに小さな村を見つけ、そこに立ち寄るついでに有力な武芸者を探そうとしていた。そこは、とても小さな村で、人も数えるほどしかいない。取り敢えず龍騎は聞き込みをしてみた。

「すいません、この辺で腕のある武芸者の話つて聞いたことがありますか？」

近くの青年に声を掛けてみる。

「あなたはもしかして・・・新しい武神の・・・大神 龍騎さんですか？」

青年が驚いて声を上げる。武神といえば世界中の憧れでそんな超有名人がこんな名もないような村に来たとなれば驚くのも当然である。その隣から別な男が話しに割つて入つて来た。

「テメエが新しい武神か？弱そうなツラだなあ。こんな奴が今の武神なら前の武神も相当弱かつたんだろうな～これなら俺は強すぎて神様になっちゃうかもな～」

大柄の男がいきなり龍騎を挑発する。当然龍騎が怯むわけがない。むしろ呆れてしまつた。しかしそれと同時に怒りもある。前の武神つまり煌輝を侮辱したのだ。龍騎が許すわけもない。

「そんな弱いと思うなら・・・少し遊んでやろうか？但し・・・あんたが死んでもいいならね」

「ガキが・・・調子に乗るなよ？テメエこそぶつた斬られる覚悟は出来てるんだろ？な？」

男は背中から巨大な大剣を取り出した。重さで地面にめり込んでいく。こんな奴に負ける気など微塵もしない龍騎の挑発は続く。

「あんたお祈りはすんだかい？ちゃんと天国に行けますようにってさ、あんたの名前は？一応聞いてやるよ感謝しな」

明らかに怒りを顕にした男。男が叫ぶ。

「テメエこそお祈り出来てるんだろうなあ？俺の名前は・・・鬼だ。この大剣がどうしてこんなに赤黒いか分かるか？血だよ。この色は今まで俺が斬ってきた雑魚どもの血さ！てめえの血もしつかり塗つてやるよー！」

面倒くさそうに龍騎が前に進む。刀はまだ抜いてない。自らを鬼と呼んだ物が片手で大剣を持ち上げる。力だけはありそうだ。まずは横薙ぎに振るつてくるので龍騎は跳んで躰した。相変わらずゆっくり鬼に向かつて進む。それでも刀は抜いてない。鬼は横にある大剣をそのまま上に上げ上空の龍騎に向けて振り下ろした。龍騎は大剣が落ちる前には地面に付いており何事も無かつたかのように、進む。

「チヨコマカチヨコマカと・・・邪魔臭いんだよ！餓鬼がー！」

また力任せに横薙ぎをしてくる。さすがに飽きた龍騎は一気に勝負を決めにかかる。

「神鳴流奥義 麒麟」

首筋に向けての太刀筋だったので潜るのは容易だつた。そのまま鬼に急迫する。すぐそこなのに刀は抜いていない。この距離に入つた瞬間龍騎の勝ちは決まつていた。虚蝉の構えで鬼の背後まで回りこむ。あまりの疾さに鬼は何処に行つたのか全く分かつていなかつた。呆れた龍騎は背後でわざと大きな溜息を付く。ようやく鬼にも分かってくれたみたいだ、慌てて背後に刀を振り回す。それももう遅かつた。

「あんた・・・弱すぎるのに調子に乗つてんじゃねえ、そして神鳴を、兄さんを侮辱するな。」

ようやく抜いた刀で鬼の背中を一刀両断する。二つに分かれた鬼が転がる。これなら山賊の方が強かつたかな？とも思う龍騎に村中から歓声が起きる。さつきの青年が声を掛けてきた。

「ありがとうございます！今まで私たちはずっとあいつのせいでの大

変な思いをしてきたんです。ただちょっと力があるからって僕たちをこきつかつていいようにされてきたんです。けどそれも今日で終わりです本当にありがとうございました！」

「どうやらこの村は鬼のせいで大変な苦労をしてきたらしい。龍騎は青年に、もう一度強い武芸者について尋ねると青年は快く答えてくれた。

「ここから割とすぐ近くに王国があります。そこには結構強い人が居るみたいですよ？ 確か頭首がお姫様って言つすごい流派だった気がする・・・」

「お姫様が頭首？ それは凄いな。ぜひ案内させて欲しいんだがいいかな？ あとその姫さんはどんな武器を使うんだ？」

「僕でいいなら喜んでご案内します。えっと武器は確か・・・そう弓です弓使いです！」

弓はここ数年戦つてない相手だ。中々強い上に一国の姫と言つ。興味が湧いてくるのは当然のことだった。そういう出会いの為にわざわざ旅に来てるのだから。このあと二人はすぐに出発した。それは龍騎の運命の出逢い。そしてこれが龍騎の新たなる戦いになるとはこの時まだ誰ひとりとしてわかつていなかつた――

第八話 新たなる戦い（後書き）

取り敢えず第武部の一回目だったのですんごく、弱い人を出してみました。そして次回の武神伝はこの作品初のそして僕の作品で初の女の子が登場します！今までの武神伝には無かつた要素として、そして第武部の重要人物として登場予定です。ちなみに現在もどんな性格にするか悩んでおります。皆さんこれからも武神伝の応援をよろしくお願いします。

第九話 運命の出逢い（前書き）

強さを求める旅だった、龍騎。そこで強いと尊われる一国の姫に会って行くこととした。それは龍騎の運命の出逢い——

第九話　運命の出逢い

小さな村から青年の案内を受け、城を目指す龍騎。ただ黙つてゐるだけでも退屈なので色々尋ねることにした。

「その姫さんってそんなに強いの？」

強くなくては行く意味が無い。念のため聞いておくことにした。

「それは、かなり強いです！昔、自分の身分を隠して結構大きい大会に出たんですけど、女はその人ただ一人で他の男を圧倒！それで優勝したんですよ！」

それは凄いと、龍騎は軽く驚いた。普通姫というのは自分で身を守るのではなく、騎士等に守つてもらうもの。それなのにその強さは興味が湧いてきた。

「んで、その人何流のなんて言う人？」

「その人は・・・昔から続く弓の名門村瀬流 村瀬 舜です！」

龍騎が息を飲む。その音は青年にもはつきり聞こえていた。

「村瀬流だと？・・・弓を持たせたら鬼より強いとまで言わせた、あの流派だぞ？その娘が一国の姫なのか？」

村瀬流は、八雲の明仁流や、龍騎の神鳴流に並ぶ名家で弓に関しては最強とされる。後方に村瀬流さえ居れば勝ち戦。そう言われることもあつたという。戦えば八雲の時や煌輝のようにかなりの傷を負うことをこの瞬間龍騎は感じ取つた。

「そつか・・・次は村瀬流とか・・・大変な戦いになるな。けど俺はこんな所で負けてなんかいられない、俺は必ず勝つ！」

その時龍騎の目の前に城が見えた。

「ここがその城です、中に入りましょう

二人は城の中に入つていった。

「この城、随分荒れて酷いな・・・」

そこに写つたのは、ボロボロの家や、人。城に活氣はなく何時死ぬ

のかという恐怖に怯えているような目をしている民が殆どだった。

「この間までは、綺麗な城下町だつたはず・・・いつたい何が？」

青年もこの城の様子に理解が追いついていない様子だった。どこか

に侵略でも受けているのだろうか。と思つた瞬間――

「弓矢！？いつたい何処から、そして誰が！？」

龍騎の元に矢が飛んできた。慌てて避けるがそこに矢を放った人影は見えなかつた。すると城門から一人の女性、女の子が出てきた。

「この城に何のようでしようか？今、城は疲弊しきつております。旅人をもてなす余裕など御座いません。」

弓を持つた少女。その姿は、龍騎の想像を超える、美しさであった。黒髪の少女は、腰まである長い髪を垂らしこちらを真つ直ぐ見つめている。その右手には弓を持っていた。

「俺は、現武神の大神 龍騎。この城に強い姫が居るつて聞いたのでここまで参りましたが、この城はどうしてこんなにも荒れているのですか？」

普段より何倍も丁寧な口調で喋る。少女、村瀬が答えた。

「この城は・・・現在他国への侵略を受けています。理由は私を含めた、村瀬流の吸收。それを拒否した我々に対し、現在このような攻撃をかけています。この国はもう疲弊しています。それで貴方もその国の者かと思い、つい矢を放つてしましました。申し訳御座いません」

そこまで欲しがるのならやはり、村瀬流は相当の力があると感じた龍騎が村瀬に答える。

「いえいえ大丈夫です。大変のですね、本当は僕と戦つて貰いたかったのですがそんな余裕ありませんね、僕らはこれで失礼します」

ちょっと惜しい気もするが立ち去ろうとした時村瀬に呼び止められた。

「待つて下さい！私で良ければお相手します。その代わり私が勝つたら武神である貴方にこの戦闘に参加してもらいます。それでいいですか？」

思わぬ条件付きではあつたが、拒否する理由は無かつた。

「分かりました。それで条件を呑みます」

一人の強い武芸者として、そして一人の女の子としての興味もあつた。

「ではこの城下町の一区画で戦いたいのですが宜しいですか？」

「ええ、構いませんそれでは早速始めましょうか」

戦う場所にしてはやや広めだが、問題はなかつた。

「分かりました、ではよろしくお願ひします、私は村瀬流、村瀬栄です」

「こちらこちらよろしくお願ひします、俺は武神の神鳴流、大神 龍騎です」

軽い挨拶をした瞬間——矢は飛んできた。まずは避けるがその避けた方向にまた次の矢が飛んでくる。何とかかわすが、全く近づけない。このままでは埒が明かないでの無理やり飛び込んでみる。その時村瀬は一つの弓で矢を一本同時に放ち龍騎の頭と足を同時に狙つてきた。軽い舌打ちをしながら横に回りこみ再度接近する。今度は村瀬が龍騎のやや横に矢を放つてきた。村瀬が初めて矢を討つのを失敗したと思つた次の瞬間——矢が急速に龍騎に向かつて曲がつてきた。

「嘘だろ！矢が曲がつただと？」

言いながら後ろに下がる龍騎だが意表をつかれたため間に合わない。腹をかすつた。村瀬はこの隙を見逃さず今度は真っ直ぐに一本の矢を同時に放つてきた。龍騎が大きく横に跳ぶ。村瀬の正面まで飛び再度急加速した。真っ直ぐ来た矢に左右に動くことで対応する。その時また村瀬が不可解な矢を放つた。今度は弓を上に向け、矢を上空に放つた。その矢を気にすることもなく前進する龍騎。切つ先が村瀬を捉えようとしたその瞬間——矢が降つて来た。空から矢が落ちてきた。それは龍騎の目の前、でこをかすつた。怯んだところに村瀬の追撃が来る。横に動くも、何発か足に刺さつた。村瀬が動きながら矢を放つ。龍騎に休む暇を与えなかつた。

「さっきの降つて来た矢の先端は、鉄だつた。あの先端の重さを利
用して、矢を上に放つた後、重さで下を向き、そのまま加速して落
ちてきたんだ、こいつ相当強いぞ」

尚も矢を連射する村瀬。考える暇すら『えてくれなさそうだ。

「曲がる矢はおそらく矢についている羽を片方だけ伸ばして、風の
当たり方を調節して矢を曲げたんだ。それで俺を正確に狙えるのな
ら、こいつは・・・」

また村瀬が弓を横に向けた。矢を曲げるつもりだ。

「村瀬流奥義 双そつぎよ矢や！」

龍騎の左側へ真っ直ぐ飛んだ矢は途中で急激な方向転換をし、龍騎
の横腹に突き刺さりそうになつた。刀を使わず、後ろへ下がるとす
でに正面から矢が飛んできた。今度は矢を真ん中から切り裂き半分
に矢を破壊して矢を無効化した。

「村瀬流奥義 破魔矢！」

上空に矢が舞う。龍騎は村瀬に突進した。元々龍騎が居た場所に矢
が刺さる。至近距離から飛んでくる矢を避けたり斬りながら、よう
やく村瀬の前まで接近できた。その瞬間——龍騎は消えた。龍騎の
得意技虚蝉である。これで背中を斬るために回りこんだ瞬間村瀬の対
処は完璧だった。龍騎が消えた瞬間、村瀬は前方に動いて、そのま
ま身体を捻りながら後ろを向き・・・振り向きざま矢を放つた。虚
蝉が見切られていたのである。虚蝉を見切られたのはショックだが、
その加速を活かして村瀬に飛びかかる。勢いを殺さないため矢は切
り倒した。村瀬目前でまた矢が曲がってきた。双？矢を使用した。
しかも今回はほぼ同時に龍騎の横を矢が飛びほぼ同時に曲がった。
龍騎が地面を思いつきり蹴り飛ばし、急加速する。何とか躱した。
しかしここでどの奥義を使うのかが問題なのである。花瓣と翠蓮は
正面からだから使っている間に討たれる。かといって虚蝉はさつき
見切られた。麒麟もあるが矢の軌道を潜つたとしても次の矢を速射
されでは困る。龍騎にはあとひとつの選択肢しか残つていなかつた。
村瀬の正面でまた龍騎が消えてみせる。

「この技は・・・もう見切りましたよ！村瀬流奥義 破魔矢！」

前に飛び龍騎に背を見せながら破魔矢を放つた。そして龍騎の方を見ようとしたその瞬間——村瀬が背中にかけ、矢を詰め込んでいた袋に刀が刺さった。村瀬の背中にも軽く切つ先が届いていた。

「ここに刀が！？一体どうして・・・」

困惑を隠せない村瀬、見切つたはずの技にやられたのだからしょうがない。

「あれは最近俺と兄さんで編み出した、神鳴流奥義 極の型 虚陽です実戦ならあなたは死んでいたと思いますがまだやりますか？」
龍騎は虚蝉と同じように背後に回った。そして村瀬が前に出ているその背中に向けて刀を投げたのである。

「いや、私の負けです。お強いですね流石は武神です」

潔く負けを認める村瀬。龍騎も力が抜けたような声で話す。

「貴方も強いです。今も足から血がダラダラ出てますからね、破魔矢も刺さつたら僕の身体は木つ端微塵でしょうね」

龍騎は両足から出血し、横腹からも少し血が出ていた。

「その・・・すみませんでした。大丈夫ですか？」

「いえいえ、気を使わなくて大丈夫ですよ。真剣勝負なんだから当たり前です。気にしないでください」

こうして二人の戦いは終わった。これからこの二人は長い付き合いになるとは知らずに——

第九話 運命の出逢い（後書き）

この作品初の女性キャラの村瀬 茉でした。今回は殆ど喋ることも無かつたので、いまいちどんなキャラクターか分からなかつたと思います。けどこれからも村瀬は重要なキャラクターになります。文 章見れば大体わかると思いますが、二人はこれから長い「付き合い」をしていきます。

という訳でこれからも応援よろしくお願ひします。

第壱拾話 龍騎無双（前編）（前書き）

村瀬流の村瀬栄も倒した龍騎。次は何処に行き誰と戦うのかー

足に何本か矢が刺さりながらも、起死回生の虚陽で村瀬を倒した龍騎。今は城で傷の介抱をしていた。

「ところで、姫さんどうやつて俺の虚蝉を躲したんですか？結構あれ衝撃的だったんですけど・・・」

龍騎が尋ねる。村瀬には虚蝉を躊躇された。今まで殆ど決めてきた大技だけあって決められなかつたのは龍騎に取つて衝撃的だつた。

「あの技は以前何かの大会で見せてもらいましたし、私たち弓使いは『』を放つて居る間に動体視力も良くなっていますし、視野も広くなつてきます。だから何となく見えたんです、決してはつきり捉えられた訳じゃないんですよ？」

成程・・・と龍騎が呟く。確かに村瀬の動きには驚かされた。こちらが接近しても冷静に弓を放つてきたことは今でも良く覚えている。そう考えて居る間に村瀬が話しかけてきた。

「もう少しで戦が始まるところだったので出来ればあなたのようなお強い方を味方にしたかったんですけど、敗れてしましましたね・・・これからは何処に向かうんですか？」

少し龍騎の心が痛む。わざわざ戦つてくれてこちらは何の見返りもないというのは少し失礼だとも思つたがまづは、質問に答える。

「・・・これから予定は未だ決まってませんね。この辺のことなんて殆ど知りませんからね、村瀬流がこんな所にあるなんて驚きましたよ。ところで一国の姫もあるあなたがどうして頭首に？」

龍騎が素朴な疑問をぶつけた。普通こんなことはあり得ない。頭首なら武に専念すればいいし、姫なら政治に専念すればよい。おかしな話である。

「私には・・・姉がいました。姉が姫のとなり。男の子が居なかつたので私が村瀬流の頭首になる予定でした。ですが・・・姉は戦で

逃げ遅れて・・・亡くなつたんです。そこで私が姉の遺志を次、姫でありながら村瀬の技も極めることにしたのです。」

村瀬が哀しそうな顔で喋りだした。

「わざわざこんなこと聞いてすいませんでした。そんな事があつたなんて・・・」

龍騎の声に反省の色が見える。村瀬は笑つて誤魔化した。

「いえいえ、気にしないでください良く聞かれますしもう慣れましたから。それより今日はもう暗いです。今晚はここでお休みになつた方がよろしいですよ?」

龍騎が窓の外を見やる。外はもう夜だつた。城に静寂が訪れる。昼夜さえ活気のなかつたこの城は夜はより一層静まり返つていた。

「それでいいのならば・・・お言葉に甘えさせて頂きます。」

正直龍騎も疲れていたので今日はここで休むことにした。

「何時戦場になるかはわかりませんが・・・明日はまだ大丈夫だと思います。それでは良い夢を」

そう言つて村瀬は立ち去り扉を静かに閉めて行つた。そして閉めた瞬間村瀬の鳴き声が聞こえた。

「お姉さま・・・明日はあなたの仇を・・・この国ためにも・・・負ける訳には行きません」

村瀬はそう言つた後立ち去つた。

「あの人も苦労しているんだな・・・多分この戦の敵国に殺されてしまつたんだろう」

そのまま龍騎は寝たが、時を同じくして敵国の大軍が龍騎と村瀬の城に向かつて進軍をしていた・・・

（～翌朝早朝～）

「村瀬様！敵国が攻めて来ました。かなりの数です！軽く七万、式万を超す大軍です！ご指示を！」

見張り役の男が叫んだ。予想より早い段階の攻撃に城は困惑した。村瀬が指揮をとる。

「騎兵隊は城門付近に展開。村瀬流の弓隊は後方に配備。落石も城門に用意して。私も出ます。祖国を守るため、皆力を合わせて戦おう！」

村瀬は指示を飛ばした後、急いで龍騎の休む部屋に向かつた。

「大神様！この城は襲撃に遭いました。今なら間に合います。城門から逃げてください。敵は大軍です。どうか逃げてください！」

慌ただしい城の様子からこの状況は分かつていた龍騎。準備を手早く済ませる。

「あなたには大変お世話になりました。御武運を祈っています」

龍騎は会釈をして部屋から出た。

「私も大変勉強になりました。機会があればまた会いましょう、お気をつけて」

龍騎は城から出ると城門に向かつて走りだした。次々に部隊が展開されていく。城門には巨大な石を落す準備も出来ていた。龍騎の目には敵の大軍が見え始めていた。急いで城を離れる。林に一度身を潜めた直後、戦闘は開始された。突っ込んでくる敵の騎兵隊に対して、まずは落石を投下した。原始的ではあるが効果のある戦略である。相手の兵が潰されていった。それでも数にかなりの差がある。騎兵隊同士の戦いとなつた。村瀬たちは後方から弓で的確に援護している。それでも圧倒的な数の差によつて村瀬側の兵が押されいく。落石も尽きたようだ。

「まだまだ諦めるな！何としても食い止めろ！」

村瀬が兵に檄を飛ばす。遠い龍騎にまではっきりと聞こえていた。

しかし敵国の歩兵も到着してきて戦況はどんどん不利になつていく。敗北は必至かと思えてきた。城門前の騎兵を突破してきた敵の部隊が村瀬たちに突撃していく。最初は何とかさばけたが数が増えすぎて、村瀬にも諦めの気持ちが生まれた瞬間——騎兵隊の突撃が止まつた。戦が止まつたわけではない。誰かが騎兵隊を倒したのである。村瀬が顔を見上げる。そこには一ノ刀を持った武神がいた。

「どうして貴方がこの戦いに？貴方は勝ちました。だから来なくて

もいいのに！」

村瀬が驚きの声を上げる。来るとは夢にも思つていなかつた。

「貴方には大きな貸しがある。それに・・・貴方も俺の様に兄弟を無くした存在だから。そして・・・大軍で攻めて来るコイツらに腹がたつたから、武神の力・・・見せてやろうと思つてねつ！」

龍騎、「武神」が吠える。敵はその姿に畏怖したのか、動きが止まる。

「来ないならこっちから行くぞ！！」

龍騎が大軍に斬りかかる。しかしこの戦場の殆どがこの劣勢をたかが一人で覆せるとは思つていなかつた。思つていたのは——龍騎本人と、村瀬 舂、この二人である。そして大勢の予想を覆す龍騎と村瀬の戦が始まつた。神鳴流の奥義は一対一を想定した技が殆どで、大多数の敵を倒すような奥義は無い。そもそも刀は刀身が短く、乱戦にはあまりむいていないのである。それでも龍騎はやってのけた。敵の防御の甘さを突いて一撃で相手を倒していく龍騎。足元は倒した兵でいっぱいになつていつた。しかしやられっぱなしの相手でもない。龍騎を全方位、8人で囲つていつた。そして8人が全員で龍騎にほぼ同時に斬りかかつた。誰もが避けられないと思つた次の瞬間——地面上に倒れたのは8人の方であつた。龍騎は兄から貰つた剣を使い、二刀流にして上段と下段の同時に回転斬りを放ち、それを同時に受け止められる者は誰も居なかつた。

「兄さんごめん、少し兄さんの神鳴二刀流と刀使わせてもらうから

龍騎はたつた一本の刀で数万の敵に斬りかかつた——

第壱拾話 龍騎無双（前編）（後書き）

ついにこの小説も10話経ちました。これも皆さんのお陰です。そろそろアクセス人数が500人に達しそうです。皆さん本当にありがとうございます！これからも応援よろしくお願ひします。

第壱拾壹話 龍騎無双（後編）（前書き）

圧倒的な数の差を埋めるため戦場に現れた龍騎。龍騎と村瀬は大軍を押し返すことが出来るのだろうか？

兄の刀を一つ借りて、神鳴二刀流で大軍と勝負する決意を固めた龍騎。龍騎の強さに半信半疑の両軍にし返すか龍騎の剣さばきだつた。さつきとは違い二刀流になつた龍騎は、一人で攻めと守りを両立し、龍騎の後ろに敵兵が立つことは無かつた。一方の村瀬も龍騎を援護する。

「村瀬流奥義・・・破魔矢！」

龍騎の頭上を超えて矢が舞う。しかしその矢は急激に向きを変え一敵軍に向かつて突き刺さつた。先端に鉄を付けてあるこの特殊な弓の一撃によつて、敵軍の真ん中に穴が開いた。龍騎がすかさず穴に飛び込む。真ん中に立つた龍騎はまるで鬼神の様な強さを發揮していた。どの方向から敵が来ても龍騎は完璧に対処している。今まさに足を狙つた槍が飛ぶ。龍騎は一本の刀を近くにいた敵兵に差し込み、身体を持ち上げ、蹴りでその一人を吹き飛ばした後、刀を抜いて槍の男を切り裂いた。今の龍騎に死角はなかつたのである。そして上から鉄の矢が降り注ぐ。龍騎が来てからすさまじい速さで敵兵が倒れていく。村瀬の軍も勢いを取り戻してきた。村瀬流の正確な援護に助けられて、龍騎の技はより冴え渡つていった。二刀流は一方の刀で相手の攻撃を受け止めながらもう一方の刀で敵を斬るという防御に優れた構えである。しかし今の龍騎は二刀流を防御に殆ど使わず、二本の刀で怒涛の攻撃を見せていた。斬るだけではなく、意表の突きも使って、龍騎は戦場で異常なまでの強さを見せた。返り血で服と刀が赤黒い。その姿は敵も味方も恐れるほどであった。真紅に染まつた龍騎が敵の増援へ向かつて駆けていく。怒涛の速さで、援軍をあつという間に全滅させた。

「これで終わりか？大したこと無かつたな・・・」

龍騎が呟いたのと同時に一人の刀を携えた男が歩いてきた。全力で

斬りに行つた龍騎だつたが——刀で止められてしまつた。かなりの使い手と感じ取つた龍騎は一寸距離を置いた。

「我らの要求は唯一つ。貴国の姫と村瀬流の吸收。抵抗するなら全員斬るぞ！」

龍騎を止めた男がこちらに降伏を求めてきた。龍騎も一寸村瀬のところに戻る。

「そんで、どうします？」

龍騎が尋ねる。村瀬が倒すと言つたら自分が迷わず出るつもりだ。「ここまで来て投降する訳には行きません。大神様……我らの代わりにあの男と闘つてくれいでしようか？」

村瀬が恐る恐る尋ねる。龍騎に断る理由はなかつた。

「勿論、僕でいいのなら僕が行きます。行かせてください」

真紅に染まつた龍騎が言い放つ。

「では……頼みましたよ」

村瀬の言葉を聞いた後、男が城門を超えてこちらに近づいてきた。

「返答を聞かせてもらおつか……」

男が馬鹿にしたような声で尋ねる。答えたのは龍騎だつた。

「俺達は投降しない……俺と一騎打ちして勝つたほうがこの戦の勝者だこれでいいか？」

龍騎が尋ねる男は軽く笑みを見せた。

「面白いじゃないか武神君。いいだろう我が流派 破爪流はさうの力、この丸山 宗吾の力を見せてやろう！」

龍騎も軽く笑つていた。龍騎が声に答える。

「自信あるのか知らないけど、俺は負けないよ。俺は武神で神鳴流の大神 龍騎。あんたに武神の強さ、俺の強さを刻みこんでやるよ」

丸山は刀を一本抜いてきた。二刀流である。龍騎は愛刀「龍明」を抜く。

「一本でいいのかな？その一つはお飾……」

丸山が言い終わる前に龍騎は斬りかかつた。まずは正面に一発。刀を交差させ弾かれる。速度を上げ横に回るも、右手の刀で止めら

れた。刀を右手から左手に持ち替えて、回転斬りするも、丸山に弾かれる。簡単に終わるような相手ではなさそうだ。だがそうでなければわざわざこんな所にまで来た意味が無い。もう一回丸山に飛び込む龍騎。しかし今度は弾かれる前に龍騎が止まつた。真下に落ちたのである。

「そんな小細工・・・！」

右の刀で低い姿勢の龍騎を斬りかかる。龍騎は虚蝉の動きで横に急速した。丸山が刀を振つたときに龍騎は地上にいなかつた。

「神鳴流奥義 虚蝉！」

首筋を斬ろうとしたが・・・鈍い音と共に弾かれてしまった。服が裂けそこには首を保護するように鎖帷子くさりかたびが見えた。

「斬られるのが怖くてそんなもの付けてるのか？」

その時、丸山の構えに異変が起きた。左手の刀を逆刃にして、右手はそのままという奇抜な構えである。

「破爪流奥義 虚無」きよむ

丸山の気配が変わつた。龍騎の顔も真剣になる。龍騎は横から斬りつけた。丸山はまず逆刃の刀で龍騎を止め、右手の刀で袈裟斬りを掛けてきた。後ろに下がつたため龍騎に傷は無かつた。武器が二つあるという利点を生かし攻守一体の技を見せつける丸山。龍騎も刀をもう一本抜き、一刀流にする。一刀流になつた龍騎は、守りを捨て、高速の攻撃に全力を注いだ。

「破爪流奥義 曼荼羅の陣」まんだら

丸山は右手の刀も持ち替え両方を逆刃にし、鉄壁の防御の構えをとつた。龍騎の攻撃が全て弾かれる。防御だけで言えば煌輝に並ぶかもしれない。龍騎は三本の刀全てを使って、丸山を斬ることにした。まず丸山の前まで突つ込み、一本の刀の間に、左手の刀を叩きつけた。そこに右手の刀も加え、丸山の防御を崩す。その時、左手の刀を捨て両手で握りしめた刀で丸山に袈裟斬りする。だが丸山を斬ることは出来なかつた。紙一枚の差で避けられてしまつた。丸山が反撃しようとした時に龍騎が奇跡を起こした。刀が届いたのである。

「神鳴流奥義 隠技 ^{いんぎ}連撃！」

地面に届くまで振り下ろした刀を右手だけで持ち、腕全体を捻った斬り上げが——丸山に届いた。頸を切り裂く一撃である。

「馬鹿なつ！刀が伸びただと！？」

困惑を隠せない丸山。それは見ている村瀬や兵たちも同様だつた。斬り上げに使つた刀はその勢いを使つて、そのまま空中に放り投げた。まば抜刀されていない刀に手をやる。困惑で守備が疎かになつていた丸山に、もう勝ち目はなかつた。

「神鳴流奥義 花瓣！！」

刀の柄を丸山の腹に当て、そこに生まれた隙に、振り上げた刀の袈裟斬りが入つた。

「馬鹿・・な・・こ・・の・・俺・・が・・」

そう言って丸山は崩れ去つた。龍騎の勝ちである。龍騎も疲れたのか地面に寝そべる。そしてこの戦いを見た村瀬は決心する。この人と共に旅をしようとい——

第壱拾壹話 龍騎無双（後編）（後書き）

今回は何時もよろちよつと長めでしたね。どうして龍騎の刀は届いたのか？これは次回紹介しますので見てみてください。意外と簡単にできますよ。

次回からは龍騎の一人旅に幕を閉じ、村瀬との一人旅・・・かもしれませんのでまだまだ応援宜しくお願いします

先日この小説のアクセス数が500人を超えるました。本当にありがとうございます。この作品を書き続けられているのも皆さんのお陰です。これからも応援宜しくお願ひ致します。

第壱拾弐話 龍騎の一人旅（前書き）

村瀬の軍を救い、強敵丸山も倒した龍騎。 村瀬は龍騎と共に旅をする決意を固めた——

大軍を下し、破爪流の丸山も倒した龍騎の姿は返り血で赤黒く刀も赤黒かつた。その姿は敵の軍は勿論、村瀬の兵もその姿に畏怖していた。

「今まで最後みたいです。終りましたよーー」

龍騎が村瀬に告げる。城の民も、兵も龍騎のもとに詰め寄る。

「助けていただきありがとうございます、これでこの城に平和が訪れます。ところで一つ聞きたいことがあります、どうしてあの刀は届いたのですか？」

刀が伸びたというのは龍騎が繰り出した神鳴流奥義 隕技 連撃の事である。誰が観ても刀が伸びたように見えた。そこで龍騎が種明かしをするように淡々と答えた。

「あんなの誰でもすぐ出来ますよ、まず右手を振り下ろしてください」

言われて村瀬もやつてみる。龍騎の説明は続く。

「そして振り下ろした手の親指は上を向いてますね？それを捻つて下に向けます。その時首も正面から少し左に向けてくださいすると・・・」

村瀬が驚く、手が少し伸びたからだ

「凄い！本当に腕が少しだけ伸びた・・・どうしてですか？」

驚きを隠せない村瀬。こんなに簡単に間合いが伸びるとは思つていなかつた。

「捻ることで肩甲骨が少しづれるんです。だから腕が伸びて間合いが増すんです。一度上から大きく斬った後、追撃のためにこの技を使つんです」

だから丸山の時も届かなかつたはずの刀が届いたのかと感心した。「教えて頂き有難うござります、そしてこの城を救つていただき有

難うございます

村瀬が龍騎に感謝の意を述べる。他の民も龍騎を取り囲み歓声を上げる。龍騎も笑みを浮かべる。自分の戦いで感謝されるのは久しぶりで、龍騎に笑みが浮かぶ。いきなり村瀬が真剣な面持ちで龍騎に話しかけて来た。次の一言はここにいる全ての人の予想を裏切るものだった。

「あの・・・私も、貴方の旅のお供になつてもよろしいでしょうか？」

何と、村瀬が龍騎と旅をしたいと申し出ってきた。龍騎も驚きを隠せない。

「お、俺と旅？貴方には、この城の政治をしなければいけないのでは？」

龍騎が聞き返す。当然の事である。城の姫が旅をするなんてあり得ないことである。しかも兄弟がいないのだから尚更である。

「この城には私よりも優れた人材が沢山います。私は貴方と旅をしてみたいのです！」

誰もが言葉を失つた。そこで城から一人の男性が出てきた。

「貴方がこの戦を救つた、英雄・・・有難うございます」

正装をした男にお礼を言われて困惑する龍騎。訳がわからない。

「あなたが・・・こここの城主ですか？」

これしか龍騎に考えられない。予想は的中した。

「はい、恥ずかしながら・・・私はこの戦で何も出来なかつた・・・恐怖で娘に任せっきりになつてしましました・・・」

城主が申し訳なさそうに龍騎と、村瀬に話しかける。村瀬が父に自分の思いを伝えた。

「父上！お願いがあります。私はこの方と共に旅に出て様々な事を学び、我らの力で城を守れるようになりたいのです！どうかお願ひします！」

男は笑顔を浮かべた。

「私はそれでも構わない。只龍騎君が・・・」

龍騎は城主の不安に笑つて返した。

「いえいえ、僕は大丈夫ですよ？ 貴方達が大丈夫なら……」

村瀬が嬉しそうに笑顔を浮かべた。初めて見る笑顔である。龍騎は自分の頬が熱くなるのを感じていた。こんな事は久しぶりである。

「では、娘を……お願いします。ですが今日はお疲れでしょう、ゆっくりお休みください」

龍騎の顔が笑顔から真剣な顔になる。

「はい、生命に代えても……必ず彼女をお守りします。」

（～翌日～）

「では、参りましょうか」

旅支度を終えた村瀬が龍騎に尋ねる。龍騎も軽く答えた。

「ええ、そろそろ行きますよ」

赤黒かつた服と刀は、丁寧に整理され綺麗な色に戻っていた。村瀬が不在の間は政治は父や、優秀な部下に任せることになった。

「私の事、姫つて呼ばないでくださいね？」

村瀬が笑顔で話しかける。龍騎がキヨトンとする。

「どうしてですか？ 貴方は姫ですし……」

そういつた瞬間、村瀬が少し不機嫌そうな顔をした。

「旅に出ているから姫でも何でもありません！」

そう言わればそうかもしえない。けどそうなると扱いに困つてしまふ。幼い頃から神鳴の子として武の鍛錬に励み続けた龍騎はいくら強くても、色恋沙汰は苦手だった。

「別に、何でもいいですよ？ 姉以外なら」

笑顔の村瀬が言つ。表情に出さないよつにしてはいるが内心は相當照れている龍騎。

「じゃ、じゃあ……村瀬とか？」

顔に出さなくとも言葉で龍騎の動揺は手に取るように分かつた。

「それでもいいですよ？ 龍騎」

村瀬が小悪魔の様な表情で龍騎に話す。龍騎は少し倒れそうになつ

たが何とか城門まで辿り着いた。

「では、行つて参ります父上」

「気をつけてな栄」

親子がしばらく出来ない挨拶を交わす。こうして二人は村瀬の城を後にし、一人で各地を巡る旅に出るのであつた——

第壱拾弐話 龍騎の一人旅（後書き）

今回は、正直いつもとは違う感じですね。特に最後の方は全く違いましたね。戦いこそこの物語の大重要な場面ですので次回はちゃんと龍騎に戦わせます。

ちなみに一人旅と行つても殆ど村瀬に出番は与えるつもりはあります。たまに出るぐらいです。そんなわけでこれからもよろしくお願いします。

第壱拾參話 龍騎の激昂（前書き）

村瀬との二人旅を始めた龍騎、これから一人を待っているものはー

二人旅を初めてから一週間が経っていた。この一週間は強敵にも会わずに、平穏な旅となっていた。しかしこの間村瀬に言われたことが一つ気がかりだった。

「この辺りには雑刀なぎなたを持った流派が集団で旅人を襲っていると聞きます。気をつけてくださいね。」

雑刀とは長い柄に刀のような刃を付けた武器である。刀より間合いがとても長いので、正直龍騎には不利な戦いになる。それでもいざとなつては絶対に負ける訳にはいかない。気を引き締めて歩いていた。その時前から五人の男たちがこちらへ向かってきた。武器を持っているのかはよく分からぬ。男たちとすれ違つたが特に何かをされたわけでもない。普通に去つていこうとしたその時——龍騎の刀が動いた。男の一人が噂の雑刀を持っていた

「アンタたち、俺らを後ろから斬ろうとしたの? そんなんで俺を殺せると思うなよ」

龍騎が冷たく言い放つ。男は軽い舌打ちをして、軽く後ろに下がつた。

「流石ですね、武神君。姫様と一緒になんて邪魔でしたか?」

男は軽く笑いながら話しかけてきた。龍騎を逆撫でするような言い方だった。

「お前ら何流? 一番強いのは誰?」

無視して龍騎は尋ねた。真ん中の男が答える。

「俺達は総亥流そうい。俺は頭首の小林 裕馬」

龍騎から汗が溢れる。暑いわけではない。小林から放たれる研ぎ澄まされた「氣」を感じ汗が出た。こんな事は普通ない。今まで戦つてきた相手にも感じるものはあった。だがこの男の氣は今まで見たことのない純粹な「殺氣」だった。

「もしかして裕馬さんに怖じ気づいた？そういうえばお兄さんは残念だつたね～」

さつきの軽々しい男がまた龍騎の神経を逆撫でする。しかも今度は煌輝のことを馬鹿にした。ゆっくり目を見開いた龍騎の目は本気の眼だった。小林だけでなく龍騎からもかなりの殺気が放たれた。今度は小林が汗をかく。それが分からぬのか軽々しい男は続けて話してきた。

「そんなに怖い目をしなくていい。どうせ兄ちゃんも大したことない」男の声が聞こえなくなつた。男の首は吹き飛んでいた。龍騎が斬り飛ばしていた。

「いい加減にしろよ、兄さんの事を侮辱するなこの雑魚が」それを見ていた村瀬も龍騎の殺氣を感じていた、怖くなるくらいに。

「あんな龍騎初めて見た。怖いけど・・・凄い」

龍騎は真っ直ぐ小林を睨みつける。他の男には龍騎の怖さが分かっていなかつた。

「こんな奴にびびらなくていいじゃないですか、早く倒しちゃつてくださいよ」

小林は軽く怒つたような口調で他の男に声を掛ける。

「お前ら・・・あの男から何も感じないのか？だったら下がつてろいるだけ邪魔だ」

龍騎と小林の殺気が一段と激しくなる。男たちは渋々下がつて行つた。

「俺は神鳴流の大神 龍騎だ。・・・行くぞ」

村瀬は固唾を飲んで見ていた。その瞬間龍騎が斬りかかる。二人の戦いが始まった。小林も素早く薙刀を抜き龍騎の刀を受け止める。当てた瞬間一度龍騎は後ろに下がり距離を置いた。反動を活かしてもう一度小林に向かつて加速する。小林は今度は突きを見せてきた。その瞬間――龍騎が消える。

「神鳴流奥義 麒麟つ！」

薙刀の真下に潜る龍騎。それを見た瞬間小林は薙刀を地面にまで下

げた。龍騎は刀を薙刀に当てながら小林まで進む、止まる気など無い。

小林が力任せに薙刀を押しこんで龍騎の刀ごと潰そうとする。

小林の薙刀が地面についたとき龍騎はまた小林から消えていた。小林は少しも同様せず薙刀の柄を背後まで一直線に下げた。その柄は刀を持つていた右手に当たり刀は空を舞つた。しかしここで引くわけにはいかない。別な刀を左手で持つて斬ろうとしたが小林自身が半回転しながら斬りかかってきたのでこれ以上攻撃できなかつた。

薙刀は刀身が長いだけあって、様々な攻撃が出来る。そもそも間合いが長いので懐に入ることも困難である。だらだらと闘つて勝てる相手ではない。地面に転がっていた刀を拾い、一気に決めにかかると決めた龍騎。小林を殺すことに少しの迷いも躊躇い（ためらい）も感じない。決めに走った龍騎は愛刀の龍明を持つて小林に加速する。小林は薙刀を地面にこすらせながら龍騎に反撃する。刀は下段はあまり得意ではないが、三本の刀を持つ龍騎の勢いはそれだけで止められなかつた。刀を薙刀に当てながら走る龍騎。一気に薙刀を押しこんでからその刀を放し、一二本目の刀で小林の心臓に突きを掛けた。しかし小林も強者。薙刀を弾かれた瞬間、宙に舞いながら回転して龍騎の突きを払つた。

「蒼風滅相撲！」

刀を弾かれただけでなく、上半身も刃は斬り裂いた。しかしそんなこと少しも龍騎は気にしていなかつた。龍騎が吠える、そして神鳴の奥義を見せる——

「こんな傷ごときで……喰らえよ神鳴流奥義　御の型　猛雷鉈！！！」

三本目の刀を抜き、両手で握り締め小林の頭上まで刀を振り上げる。しかしそのままでは薙刀に弾かれる。そこから龍騎の猛雷鉈が始まつた。最初に少し斜めから切り始めた龍騎。それでも薙刀に簡単に弾かれてしまう。そこで龍騎はいきなり刀の鍔（つば）に近い左手を突然離し右手を滑らせ、さつきまで左手のあつた場所に右手を、左手があつた場所に右手を移動させた。すると最初小林の右目から入つてい

た刀が逆を向き、右目から左目に抜ける向きに一瞬で刀が逆を向いた——その動きはまさに雷鎧のような動きだった。小林が反応する前に、龍騎の刀が入っていた。龍騎はその勢いを殺さず小林の後ろに回り込む。

「これが神鳴の——兄さんの力だ！！！虚陽！！！」
うつかげ

龍騎が三本目の刀を小林に放つ。刀は小林の背中に刺さり、小林の身体を貫通した——そのまま小林は地面に倒れた。龍騎の勝ちである。村瀬が駆け寄ってきた。

「とつても強くて格好良かつたよ！すごいねあの猛雷鎧、どうして刀が逆向くの？」

小林を倒した瞬間龍騎はいつもの顔に戻っていた。

「今日の戦いは調子が良かつたな。猛雷鎧も決まつたし。それは今度話すよ、今は少し疲れたから休ませて～」

神鳴の技を確実に会得し、高みに登つっていく龍騎。どこまで強くなるのか——

第壱拾參話 龍騎の激昂（後書き）

今回は薙刀の総亥流との対決です。煌輝を馬鹿にされ全開全力の龍騎はいかがでしたか？最初に比べ文章の書き方も上手くなつてきましたが、まだまだ未熟なのでこれからも頑張りたいと思います。

この小説もたくさんの人を見ていただけて本当に嬉しいです。これからも応援宜しくお願ひ致します。

第壱拾四話 永久の好敵手（前編）（前書き）

煌輝を侮辱されたことへの怒りで総亥流を瞬く間に潰した龍騎。 次に彼らを待ち受けているものは——

「どうしてあの時刀は曲がったんですか？」

村瀬が興味深そうに尋ねる。龍騎としてはついさつき戦いが終わつたばかりなのでそつとしておいて欲しかつたがそういう訳にも行かなさそうだ。しょうがなさそうに龍騎が答える。

「あれは、まず左手を刀の鐔に近づけて持つて右手をその下に付ける。そうするとこっちから見ると刀は左に傾くでしょ？つまり相手の右目から入つて左に抜けていく軌道になる。だけど斬りうとした瞬間に、手を持ち帰ると？」

村瀬が今度は右手を鐔に近づけ左手を下げる。すると刀はさつきとは逆に傾いた。何故か村瀬が喜ぶ。「凄い凄い！刀が逆を向いたね！これを瞬時にやつて刀の軌道を変化させて相手を斬つたんだね！」何故そこまで喜ぶのか龍騎にはいまいち分からなかつたが、龍騎が話を続ける

「斬りながら瞬時に手を持ち帰るのは大変なんだからな？簡単にできると思つたら大間違いだよ。そしてこの軌道の変化がまるで『雷鎌』のように見えたからこの技は猛雷鎌って言うよになつたんだ」相手にとつては目の前でいきなり向きが変わる刀を止めるのは至難の業であろう。そういう技が多いからこそ神鳴流は名家と言われるのである。

「それにもしても今日の龍騎はちょっと怖かつた。何か体中から殺氣みたいな気迫みたいなのが溢れてたよ？あと相手の小林つて人も」龍騎自身も今日は何時もと勝手が違う気がしていた。途中のことはあまり覚えてない。普段はこんなことは無かつた。煌輝と戦つた時も、ほぼ全ての動きを記憶している。なのにさつきのは戦いの内容をほとんど覚えていない。最後に無心で猛雷鎌と虚陽を放つことをしか覚えていなかった。

「なんかあいつらに兄さんのこと馬鹿にされてそつからあいつらに

腹立つて氣づいたら相手は皆死んでたよ、調子は良かつたけど何か俺自身は変だつたな

龍騎が振り返つて思い出す。そしてふと思い出したことを村瀬にも伝える。

「俺の爺ちゃんが昔言つてたけど、強くなつていくとその人からは自然に気迫に満ちた何かが出るようになるんだって、けどその気迫は同じ領域の強さに達しないと見えないんだって。だからその気迫が見えない時点でその人は大したことないらしいよ。栄は見えてたから結構強いってことだね」

村瀬がわざと不機嫌そうな顔をする。村瀬が反論してきた。

「私は結構じやなくてかなり強い！これでも名門の村瀬流の頭首ですよ？それを結構つて・・・私とあなたは共に人生を歩く関係のはず・・・それなのにどうしてそんなひどいことを言うの？」

若干村瀬の演技が入つてたので途中からは殆ど聞いてない。そこに龍騎の体にしげれる何かが走った。

「気をつけて栄。相当の強さを持つた奴が来る」

龍騎が言い終わると同時に、龍騎や村瀬と同年代の男が茂みから出てきた。ただ歩いてきただけなのに感じる気迫。村瀬もそれを感じ取つた。その男が口を開く。

「どうも、蘇澳流の安西 蒼真そおうりゅう の やすにし そうまとあります。あなたにお願いがあるんですけど俺と・・・ここで戦つて欲しい。」

圧力に潰されそうになりながら龍騎が返答する。

「別に断る理由もない・・・俺は神鳴流の大神 龍騎りゆうきでいいだろ？」

さつき何人か斬つた後だつたが何もないここは一騎打ちには丁度いい。

「ええ・・・構いませんなら早速始めましょうか・・・」

安西が抜いたのは龍騎と同じ刀。それも一刀流だった。それを見た瞬間龍騎の心に火がつく。同じ刀相手だつたら負けるわけには行かない。気持ちを高める。両者からは、溢れ出る殺気が出されていた。

どちらもかなりの使い手である。軽く見合つた瞬間——龍騎が飛び出すまずは奥義を出さずに、軽く斬り合いが始まる。安西も派手な動きはなく堅実な刀さばきを見せていた。戦いはまだ始まつたばかり、そしてこの一人はこの後幾度も刃を交えるのであつた——

第壱拾四話 永久の好敵手（前編）（後書き）

結局説明だけで終わつてしまひました。すみません次回は一気に決着つけます。けどこれでどちらかが死ぬことは・・・無いです。もうちょい一人には活躍してもらいます。
しばらく書くのが遅くなつてすみませんでした。楽しみにしていた方には本当に申し訳ありません。ぜひこれからも応援よろしくお願ひいたします

第壱拾五話 永久の好敵手（後編）（前書き）

新たに龍騎の前に現れた蘇澳流の安西。刀対刀の激闘はどうやらが制するのだろうか。

第壱拾五話 永久の好敵手（後編）

突如現れた蘇澳流の安西蒼真。龍騎以上の圧力を放つて龍騎と斬り合いで見せていた。武器はお互いに刀でどちらも譲るわけにはいかない戦いだつた。どちらも攻守を入れ替えながら刀をぶつけ合うが、実力が拮抗してるので中々決めに行けない。

「世の中にはまだまだ強い奴がいるんだな・・・」

龍騎は独語しながら安西に攻めこむ。しかし全て躊躇され意味のない攻撃となってしまう。龍騎は軽く刀を当てたあと虚蝉の動きで後ろに回ろうとするが先に後ろを向いた安西に止められる。お互いが軽く後ろに下がつていた。

「噂の武神だったが・・・」ここまでやるとは思つていなかつた正直予想外だな」

今度は安西が独語する。龍騎の背面からの攻めを止めた瞬間、次は安西が攻撃してきた。刀を細かく振り、手数で勝負する安西。だが龍騎もそれらを的確に受け止めていた。

「このままじや何時まで経つても終わらねえ、少し奥義使つか・・・」

「

龍騎がそう考えていたとき、安西も同じ事を考えていたことは龍騎には知るよしもなかつた。しかしここからが眞の勝負となつた。二人の気迫がさつきより大きくなる。それは村瀬が感じ取つていた。
「急に感じが変わつた・・・多分ここからが本当の勝負になつていくんだとと思う。お願ひだから死なないでーーあなたに死なれたら私はーー」

龍騎がどの奥義を使うか考えていた頃安西が先に攻めてきた。手数の多い攻撃から急に突きが飛び出していく。後ろに下がつて避けようとしたが間に合わなかつた。安西の刀が伸びたのである。あの神鳴流奥義のように。

「蘇澳流奥義 紅煉！」
くれん

若干伸びた刀に鼻の上を突かれる。考える間もなく横を向いた龍騎は安西と同じやり方で刀を伸ばし反撃しようとする。しかしその時にはすでに遅かった。

「当たらなかつたか・・・それにしてもあの技は連撃！？そんな事考えてる場合でも無いかつ」

龍騎が安西に向けて走りこむ。龍騎が血を出したことに見て入れない村瀬は声を出しそうになる。

「そんな・・・龍騎の顔に傷を入れるなんて！もしかしたら・・・」最悪のことを考えてしまった村瀬。村瀬も何度も戦いを重ねてるので簡単に想像出来てしまった。突っ込んでくる龍騎に対して安西は刀を突き刺そうとする。その瞬間龍騎は急加速する。

「神鳴流奥義 麒麟！」

頭を地面にかする所まで下げる、攻撃をかわして一気に加速する龍騎。龍騎の下からの切り上げに安西は簡単に対応した。

「そんな疾さだけの攻撃・・・当たるわけがない」

一気に龍騎の真横まで移動する安西。一度縦に加速すると横には中々向けない。間に合わなかつた。左の脇を斬られる。続けざまに背中も斬られた。その後は何とか避けたが酷い出血である。それなのに安西は無傷であつた。

「ここまで俺が追い詰められるなんて・・・正直俺を追い詰められるのは兄さんだけだと思つてた」

その時の村瀬は今にも泣き出しそうであつた。膝の力が抜ける。地面に崩れてしまつた。安西は龍騎に一切情けをかけずに斬ろうとする。受け止めながら体勢を立て直す龍騎だが今にも崩れそうである。左の脇を斬られたため左手では刀を持つことは難しくなつた。

「決まるか分からぬけど、あれを使ってみるか・・・」

考えは決まつたが攻撃には中々移れない龍騎。そこで一か八かもう一度加速を付けて・・・

「神鳴流奥義 麒麟だ！今度こそ！..」

攻撃を躲す前から加速を始めた龍騎。安西と村瀬から見ればそれは

自殺行為だった。しかし今回の攻め方は違った。加速の途中で一本目を足に向かつて投げた龍騎。安西は軽く上に跳んで躲す。一気に間合いに飛び込む龍騎。何とか引っかかつてくれたと安心していた。

「しつこいな……終わりだ！」

上から安西の刀が振り下ろされる。龍騎は別な刀を抜いて上を見る。龍騎の反撃が始まつた。

「勝負はこつからだ！神鳴流奥義 六の型 朱雀！」すざく

龍騎は刀を安西の刀に当てる途中傷を負つた左手で右手を思いつきり弾いた。すると——刀は急加速し威力も上がつた。その勢いは安西の刀を吹き飛ばしていた。

「馬鹿な！刀が飛ばされるなんて……」

安西も動搖を隠せない。村瀬も目を見開いた。

「龍騎が反撃する！これなら……」

安西が別な刀を抜く間に龍騎は全身に力を込め縦に安西を斬つた。今度は安西から血ができる。再度睨み合う二人。そしてまた斬りかかろうとした瞬間——

「これ以上はやめて！一人とも傷だらけだから……」
龍騎と安西の間に矢が降つてくる。村瀬流奥義の破魔矢だと直感する。

「一人ともこのままだと死ぬからもうやめてよ！――」

無言になる龍騎と安西。村瀬が泣きながら話す。

「もし、龍騎に死なれたら……私は……だから……今日は身体を休めて……」

それを見て聞いた安西は刀をしまう。それにつられて龍騎も刀を戻す。村瀬のところに駆け寄つた。

「『めん、栄ちょっと無理しすぎた。今日はもうやめるよ』安西が後ろを向き歩き出そうとする。龍騎が呼び止めた。

「ちょっと待つてくれ。安西……いや蒼真強かつたよまた会おうな」

「お前こそ、龍騎お前を倒すのは俺だ。それまで負けるなよ次は万

全の状態で戦いたい。またな」

そう言つと安西はどこかに歩いていった。

「栄^{さか}めんな、俺は死んでないんだから泣くなつて」

ようやく笑顔を見せた村瀬。龍騎の顔にも笑みが浮かぶ。

「もう無理したら駄目だからね？約束だよ？死なないでね・・・」

今までは一人だったからこんな心配してくれる人はいなかつた。だが今は心配してくれる人がいる。これはとても嬉しいことだと龍騎は思った。その為にも更に上を目指そうと決意した――

第壱拾五話 永久の好敵手（後編）（後書き）

- ・ これで一応龍騎対蒼真は終わりです。まだこの二人は戦いますが・
そして強くなる龍騎と徐々に近づく龍騎と村瀬の距離にこじ注目下
さい。
- この小説も何百人の人に見てもらつてとても嬉しいです。これから
も応援宜しくお願ひします。

第壱拾六話 龍騎の恋心（前書き）

辛くも蒼真を退けた龍騎。その影には村瀬の説得があつたからだつた。龍騎は自分が村瀬に抱き始めた感情に気づくことが出来るのか――

第壹拾六話 龍騎の恋心

「全く、こんなに怪我して死んだらどうするんですか？」

村瀬に怒られながらも包帯を巻いてもらっていた龍騎。ここまで自分の身を案じてくれる人がいるなんて今まで気付かなかつた。一人旅をしてきたから誰とも話さず、怪我をしても一人で処置をしてきた。一人旅もいいものだとこの頃思うようになつてきついた。そしてその思いは仲間だけでなく、それ以上の思いであることを龍騎には未だ分からなかつた。

「うん、もういいよありがと。まあ俺は負けないと思つてたから・・・ちょっと無茶を・・・」

初めて顔を見たときから、可愛いとは思つていたが最近は前より愛らしく見える。自分の誇りのために戦つてきた頃とは違ひ村瀬のためにも負けられなくなつた龍騎。

「龍騎どうしたの？ちょっと顔が赤いよ？熱かな？」

どうやら少し顔が赤くなつていたらしく、心配をかけないために笑つて誤魔化す。

「そう？気のせいじゃない？俺は健康だよ？」

その時村瀬が額を近づけ龍騎の額と重ねる。龍騎にとつてはこつちの方が熱を出しそうだつたが何とか我慢した。何故こんな気持ちになるのか龍騎にはわからない。何故なら小さい頃から武芸の修行に打ち込んでいた龍騎はそんな事を考える余裕など無かつた。当然恋などしたことがない。そんなことを考えていると村瀬が龍騎の考えていることがわかつたのか質問をしてきた。

「龍騎つて好きになつた女の子つていないので？」

いきなりの質問に少し戸惑うが、龍騎は本当のことを答えた。

「俺は小さい頃からとにかく刀を持つて鍛錬を積んできたからな・・・

・そういう感情がどういうのかはいまいち分からんのだよ・・・

強いて言えばこの刀が恋人かな・・・

最後のは冗談で言つたつもりだが村瀬は冗談は通じなかつたらしく

「龍騎・・・可哀想にね」

と冷たく言われてしまった。龍騎が必死に説明する。

「栂、最後のは冗談だからな？あんまり真に受けるなよ？」

いつの間にか村瀬のことを栂と呼ぶようになつた龍騎。そして弁解してみたがもう遅いらしい。それにしてもいきなり村瀬がこんな事を聞くのは珍しい。そこで龍騎も村瀬と同じ事を尋ねた。

「そういう栂は・・・いるの？」

村瀬が少し驚きながら否定した。

「え！この私にはいませんよ！私も小さい頃から矢の鍛錬に忙しかつたので」

嘘を付いたが何とかばれなかつた。

「それは貴方です。なんて言えるわけがない・・・」

そう心のなかで呟いた村瀬。昔龍騎の戦いを観戦した時から、彼に惹かれていた。そんな彼が偶然私の城にやつてきた。そして城の危機を救つてくれた。さらには自分と旅をしている——今度は村瀬が考え込んだ。正直村瀬もこういう事はよく分からぬ。龍騎にも言つたが自分も小さい頃から矢の鍛錬をしてきたのでそういう事を考える暇はあまりなかつた。それでも龍騎に憧れ今日まで頑張つてきた。

「そつか栂もいないのか」

龍騎が少し残念そうに言う。そして龍騎は村瀬に聞いてみる。答えは出ないかもしだが

「なあ栂、人を好きになるってどういう事だと思う？」

村瀬がびっくりする。いきなりそんな事を聞かれるなんて思つてもいなかつた。自分の答えに不安はあるが一応答えてみる。

「！いきなりどうしたんですか？えつと多分それは・・・その人の事をずっと考えていたり、その人の事で悩んだり、そして・・・その人の事を自分より大切に思つたらですかね？」

村瀬に言われて氣づいた気がする。最近は自分の技のことより村瀬

のことを考えているし、村瀬への感情で悩みもした。そして・・・

村瀬の事を大切にしようとも思っている。つまりこれが――

「急にこんな事を聞くなんてどうしたの? もしかして誰かのことが

――」

「栄、聞いて欲しいことがある」

村瀬が言い終わるより早く龍騎が喋っていた。この想いは今すぐ伝えようと思ったからだ。村瀬も龍騎を見つめる。

「俺は今まで自分の為に戦い続けてきた。だけどこれからは違う、今まで俺を支え続けてくれていた人のため――栄のために戦う。今日まで俺を支え続けていた人のため――栄のために戦う。

栄、好きだ。」

龍騎の突然の告白に顔が真っ赤になる村瀬。当然龍騎の顔を赤かった。そしてこの言葉は栄に取つて素直に嬉しかった。

「はい! 私も貴方のことが――龍騎のことが大好きです!」

今まで見たこともないような笑顔を見せられ本当に倒れそうになつたがかるうじて耐えた。

「もう、無理しないでね? 負けてもいいけど死ぬのは絶対駄目だからね?」

そんな事を言わながら抱きつかれた。啞然とした龍騎だが、村瀬を抱き返す。

「ああ、分かつた。でも俺は――必ず勝つ。栄のためにね」
こうしてこれから二人は歩くときは必ず手を繋ぐようになった。
刀だけを握り続けた少年の心に、「愛」という感情が芽生えた日だ
つた――

第壱拾六話 龍騎の恋心（後書き）

今回は戦闘はお休みして、一人の会話に集中させました。たまにはこういう話もいいんじゃないかと思います。これからは旅の仲間ではなく、恋人となつた二人の活躍をこれからも応援宜しくお願ひします。

第壹拾七話 村瀬の嫉妬（前書き）

村瀬に自分の想いを伝え、恋人となつた龍騎。次はどんな敵と戦うのか――

とある草原を一人が手をつけないでゆっくり歩く。一歩一歩踏みしめるように。この一人はもちろん龍騎と村瀬である。龍騎が告白してからは必ず手をつけないで歩くようになつた。特に龍騎は武神だけあって、町では色々言われるが気にしないことにしてる。ここまで道中で何人かの人間と戦っているが龍騎の動きは驚異的であつた。もとからあつた疾さにより磨きがかかり、ろくに姿を捉えることも出来ず斬られていく。多分これが「愛の力」なんだろうと龍騎は確信していた。

「龍騎、もう少しで次の街ですよ」

そんな事を考えていると村瀬から声をかけられる。龍騎も微笑みながら返す。

「うん、疲れたから寄つていいくしょ？」

「出来れば寄りたいかな・・・」

「分かつた、じゃあ寄ろつか」

守りたい人がいるとここまで人は変わるものかと龍騎は思つていた。昔ならこんな事は絶対になかつたと思う。技にも磨きがかかってきたし最近は充実していると思っていた。

「中々広い街ですね」

「結構大きいね」

当然二人は街中でも手をつけなぐ。龍騎は有名人なのですぐ人にだかりができる。周囲から色々言われてるが全て無視し街を歩いて回つた。すると突然後ろから声をかけられる。無視しようと思ったが中々無視できない内容のものだつた。

「貴方、今の武神でしょ？ だったらあたしと戦いなさい！逃げるのは許さないんだから！」

「いきなり何なんだ？ こんな所で戦うのかよーー」

そう言つて声の方向に振り返るとそこには、髪は村瀬と対照的に短く切つた女の子が立つていた。当然栂も可愛いがこつちはこつちで

中々可愛いと思う。つい見とれてしまつた。

「私の名前は佐藤 美穂みほ！ 流派は、棍術こんじゅつの饗饌流きょうせんだ！」

髪の色は橙の綺麗な髪だった。見とれていたが我に返り栂に戦いの許可を取つた。

「栂？あの娘と・・・戦つてきていい？その間街を見ていれば――」

「戦つてくれば？私はそこら辺を歩いてるし・・・」

「もしかして栂・・・怒つてます？」

「別に・・・早く戦つてくれればいいじゃんっ！」

そう言うと村瀬は何処かに行つてしまつた。龍騎は反省しながらも、佐藤美穂と名乗つた人物を見つめた。戦うという意思表示である。

「わかった、戦つてやる・・・俺は神鳴流の大神 龍騎だ」

「場所は此處でいいな？一対一の真剣勝負、本気を出さなかつたら許さないからね！」

「分かつた、かかるってこいよ・・・」

龍騎の身体から気迫が溢れでてくる。それは佐藤も同じだった、次の瞬間二人は真剣勝負を始めた。

その頃村瀬は一人寂しく街を歩いていた。

「龍騎は私より、あの娘が好きなのかな・・・そうだつたら哀しいな・・・」

あの時、龍騎は絶対にあの娘に見とれていたと思う。気にし過ぎかもしれないけど、多分そんな気がしたそしてそれはとても寂しかつた。

「これが、嫉妬つていう気持ちのかな・・・」

今まで自分が味わつたことのない感情に気づく。言葉では説明できないような、胸を突くような痛みだつた。それだけ自分が、彼のことを好きなんだと思う。同時にさつきの自分の言動を反省する。

「さつきは龍騎に冷たくしちゃつたな・・・怒つてないといいけど。

今から見に行こうかな・・・

村瀬がこんな事を考えている間、龍騎は苦戦していた。棍と戦うのはこれが初めてで不規則な動きに戸惑っていた。一度刀にぶつけた後背中へ回して逆方向から攻撃されるなど、刀や槍にはない動きを見せていた。棍という武器は、棒のような形状をしている。刃はないため、基本的に突きで攻撃する。また刀より太いため正面から当たると簡単に刀が壊れそうで迂闊には攻撃できない。槍よりも厄介かもしれない。そしてもうひとつ理由が村瀬のことである。自分のことを嫌つてしまつたのではないか等と考えていると反応も遅くなってしまう。そして自分の甘さを後悔することになる。

「饗饌流奥義 無双連弾！」

佐藤が踏み込みながら棍を無数に突いてくる。最初のうちはかわし続けていたが徐々にかわせなくなる。そしてついに腹に重たい一撃が入る。そのあとは動けず10発ほど喰らった。内臓が押され潰されそうになる。更に佐藤は重たい一撃を浴びせた――

「饗饌流奥義 天穴！これで決めるよ！！」

一度棍を引いて構える佐藤。龍騎には構える力は残されていなかつた。佐藤は棍を放つと同時に棍を螺旋状に回転させ、龍騎の腹でねじの様に回転した。龍騎が口から血を吐く。あまりの衝撃に後ろに吹き飛ばされた。

「もうやめとく？」これがあんたの全力とは思えないけど・・・ちゃんと本気を出しなさいよ！」

余裕の佐藤の声を聞いてると自分に腹がたつてきた。余計なことは考えず今は本気での女を殺そう。そう決めるとゆっくりとだが龍騎は立ち上がった。

「ここからが本番だ・・・神鳴流の力にひれ伏しな！」

そつは言つたものの内蔵にそうとうの傷を負つたため何時ものような疾さは出せない。佐藤が来るのを待つて反撃を試みる。しかし刀では棍の間に勝てない。そこで龍騎は、あの男を撃退した時と

同じやり方で倒そつと考えた。まずは下段をしつこく攻める。防衛に疲れたのか、佐藤は後ろにさがり、棍を自分の頭上に持ち上げ振り回す。

「饗饌流奥義 地碎衝ちさいしよう！」これで終わらせるんだから…」

頭上で棍を高速回転させその勢いを活かして龍騎に叩きつけてきた。しかし龍騎もここで引くわけに行かない。神鳴流奥義を遂に発動させる。

「弾き返してやる…・・・神鳴流奥義 朱雀！」

空いている手で刀を握っている手を弾き、剣速を増加させ、相手の武器を弾く技。しかしながら威力が足りない佐藤も勝利を確信する。

「そんなんじや地碎衝は弾けない！私の勝ち！－！」

そこで龍騎が朱雀に更に奥義を上乗せする－－

「誰がこれで終わりつて言つた！神鳴流奥義 七の型 八咫鏡やたのががみつ！」

！」

朱雀に使つた左手をもう一度刀のとこひへ持つて行き、右手と合わせて刀をねじの様に回転させた。

「これは・・・天穴と同じ動き？」

佐藤が驚く、龍騎には打ち勝つ自信があった。

「この剣速と、回転なら－！」

鈍い音がして、龍騎は仰け反った。しかし、佐藤もまた棍を弾かれた。佐藤は驚きを隠せない。

「棍が刀に負けた！？」

刀を構え直しながら、佐藤に刀を向ける。そして喉元で刀を止めた。

「まだ、やるのか・・・」

龍騎が冷たく言い放つ。当然佐藤に余裕はなかつた。棍を地面に置く。

「その・・・降参したわけじゃないんだからね！えっと・・・疲れたからやめるだけなの！アンタのことが強いだなんて・・・思つてないんだからっ！」

思わず啞然とする龍騎。どうやらこの娘は気難しそうだ。

「龍騎！大丈夫だった？こんなに血を吐いて・・・」めんなさい私がいきなり怒つたから・・・

村瀬が駆け寄る。龍騎は未だに血が止まらなかつた。

「ごめん、栄・・・悪かつた。その・・・嫉妬でもしたの？」

「まあ・・・だつてあの娘をあんなに見つめてたから・・・一目惚れしちやつたのかなつて・・・それで不安になつて・・・そしたらつい怒つちやつて」

「もう大丈夫だよ今田はごめんね」

二人とも素直に謝る。それを見ていた佐藤は――

「どうしてこんなに腹が立つの？負けたから？いやそれよりもっと別な何か・・・もしかして私・・・いや！そんな事はない！確かに格好いいけど・・・私も一緒に旅させてもらえるかな？」

そんな事を考えていた佐藤は思わず口にしていた。

「一人とも・・・ちょっとといい？私も貴方達と一緒に行きたいんだけど・・・べ、別に龍騎君と一緒に居たいわけじゃないんだからね！」

この言葉が龍騎と、栄を混乱させてゆく――

第壹拾七話 村瀬の嫉妬（後書き）

何か最近雰囲気がどんどん変わってしまいましたね。一応、佐藤美穂は何と言つかツンデレキャラを狙つてみたんですけど……語尾がほとんど同じで失敗した気がします。しかも何か修羅場みたいになっちゃったし……どうしよう一人旅はもうやめて三人旅にしようと、それとも一人旅を続けようかな……相変わらず駄文ですが、よろしくお願ひします。

最近、ツイッターで宣伝を始めました。見かけたらぜひフォローしてあげてください。

これからも応援宜しくお願ひいたします。

第壱拾八話 龍騎と女の子達（前書き）

突如現れ戦つた、佐藤美穂と一緒に旅をしたいと誘われる。 村瀬はどうなつてしまつのだらつか——

龍騎と

第壹拾八話 龍騎と女の子達

龍騎と村瀬は驚きを隠せない。いきなりそんな事を言われるとは夢にも思つていなかつた。

「だから・・・一緒に旅がしたいの！私も居たら・・・嫌だ？」
瞳を輝かせながら言わると困る。取り敢えず村瀬と相談することにした。

「栄、どうすればいいの？」

「分かんないよ・・・嫌な子ではなさそうだけど・・・」

龍騎も村瀬も返事に困つていた。そこで龍騎がある疑問を口にする。

「どうして、君は俺達と行きたいの？俺ら行き先とか無いよ？」

佐藤は顔を赤くしながら恥ずかしそうに答える。

「アタシは・・・龍騎君と一緒に・・・じゃなくて！強いアンタと居ることでアタシの方が強くなるためだもんっ！それに栄さんともお話ししたいし・・・」

龍騎も村瀬も困り果てていた。そして村瀬があることに気がつく。そしてそれを龍騎に伝える。

「もしかして・・・あの娘は龍騎の事が好きなんじや？」

「本当に？まだ会つたばっかりなんですけど・・・」

驚いた龍騎は、つい佐藤に聞いてしまう。それが間違いだつた。

「君つて、俺のことが好きだつたりする？」

「アタシは・・・全然龍騎君なんて好きじやないもんっ！その・・・格好いいとは思つけど。とにかく！龍騎君は別に好きでも何でもないの！」

隣で村瀬が笑つてる。村瀬が龍騎に耳打ちする。

「これは、絶対好きですね。これは連れていくしか無いんじゃないですか？」

「本気で言つてるの？」

「私は何時だつて本気ですよ」

軽く溜息する龍騎だが、こうなつてはどうしようもない佐藤も連れていいくことにした。

「えつと佐藤も、俺達と来ていいよ?」

一気に佐藤の顔が笑顔になる。村瀬とは違つた魅力を感じる。「アンタが呼びたいなら・・・名前でも良いけど?呼んで欲しいわけじゃ無いけどねっ!」

こういう時は名前で呼んでほしいと龍騎は理解した。

「分かつたよ。行くよ美穂」

少し驚きながら嬉しそうに美穂は付いてきた。

「ようしくね美穂ちゃん」

「ようしくお願ひします栞さん」

美穂が丁寧なあいさつをしていることに驚く。何故こんなに扱いが違うのか龍騎にはさっぱりわからない。栞が手をつないできた。美穂が少し哀しそうに聞く。

「もしかして一人つて・・・その恋人ですか?」

「「うん、そうだよ」」

龍騎と栞が同時に答える。

「美穂、嫌だつたら戻つていいんだぞ?」

一応龍騎が聞いてみる。しかし意味はなかつた。

「だからアタシは龍騎君なんて好きじゃないもんつ!」

その後に小声で呟いてたのを龍騎は聞き取れなかつた。

「何時かは・・・必ずアタシに振り向かせるもん・・・」

こうして二人旅から三人旅になつた龍騎達。これから彼らはどうなつていくのだろうか――

第壱拾八話 龍騎と女の子達（後書き）

なんだか、どんどん変な方向に来てしました。自分で訳が分からなくなつております。次はちゃんと戦います。人が増えたりしません。ですがその前に番外篇を一つやりたいと思います。今回は誰の話でもなく、今後の主要人物と作者を交えての座談会のようなものをやろうと思つています。番外篇なので何時もとは全然違う雰囲気になると想つので、そつちは気楽に読んでいただければ嬉しいです。

これからも応援宜しくお願ひいたします。

番外編　皆で座談会（前書き）

今回は、番外編なので、なんでもあります！作者も話します！！！

龍騎「ホントに何でもいいのか?」

作者「別になんでもどうぞ、俺に言いたいことでもいいぞ?」

八雲「久しぶりだけど一つ言わせて？出番ください・・・」

作者「久しぶりだな！八雲、もうちょい待つてくれ！」

八雲「俺、待てないよ！暇だよ！…する」と無いよ。」

作者「お前は第二部に出てくる……」

「第三部なんてあつたの?」

作者「まだ話していない人もいつぺんに言つてきたな・・・」

村瀬「だつて作者が早くハーレムの作品書きたいつて・・・」

佐藤「その練習に、私を出したって聞いてるんだから！」

作者「それは言つたら駄目だよ！！美穂、ごめんその通りです・・・」

1

龍騎「言つなよ一人とも作者は技名と、名前で毎回無駄な時間使いまくりなんだから」

村瀬「やつぱり……私の流派だけ何故か苗字だったから……そうとうやる気ない……」

作者「それも言わないで！－！けどやる気あるからね－…？」

八雲「第三部つて何するの？俺活躍するの？？」

作者「第三部は一対一より戦争メインかな？ちなみにこの中の誰かは絶命するから覚悟してね？」

龍騎「俺も死ぬのか？主人公だしそれは……」

佐藤「甘いよ龍騎君作者は始業式なのに午前4時半までAngel eats！を見たつていう酷いオタクだから……しかも夏休み一日でAIも全部見てラスト号泣したんだよ？だから作者は主人公を殺すことは泣ける話つて勝手に信じてるからね。この作者じや失敗するのに……それにアタシ龍騎君とやりたい……つて別に何も言つてないんだからっ！」

龍騎「俺達の作者つてそんなに酷いオタクだったのか！残念だ……」

「

村瀬「周りからクラス一のオタクつて呼ばれてるそうです」

作者「お前ら……あんまり言つてると毎殺しちゃつよっ」

安西「ちなみに作者はA－！のコイが好きで消えたとき泣いたらしい……」

作者「安西まで……こいつなつたら八雲を主人公にしてやる……」

八雲「来た！オタクのくせに良いところあるなーー！」

龍騎「騙されるなー本当はハ雲を殺そうとしてるんだぞーこの駄目作者はー！」

八雲「嘘だろ？？そんな馬鹿なことが・・・」

作者「龍騎言つたら駄目・・・」

八雲「酷い作者だ・・・」

佐藤「もっと文章が上手な人に書いてもらいたかったー！」

「・・・その通りだ・・・」

作者「皆して酷くない？ちょっと・・・」

佐藤「アタシもいい人が書いてくれば萌えるシンデレになれた・・・いやアタシはシンデレじゃないもんっーー！」

龍騎「そういう書き方がが下手なんだよ・・・」

作者「そんなこと俺が一番わかってる・・・」

村瀬「こいつ、最終的に私と龍騎でR15な話を書こうとしている噂も・・・」

八雲「オタクで変態で駄文しか書けないのか・・・」

龍騎「こんなやつに書かれるなら死んだほうがいい・・・」

作者「旨して酷いよ・・・」

村瀬「しかも受験生なのに勉強しないし・・・」

安西「高校を馬鹿にしてるからな」については・・・」

作者「それは一番言わないで・・・」

「・・・勉強しない自分が悪い」・・・」

村瀬「そのくせ志望校が無駄に頭いいんですよ？落ちるに決まっています」

佐藤「こいつが受かつたらマジメな人たち可哀相だもんね！」

龍騎「こいつの代わりに落ちる人なんて・・・屈辱だし最悪だし、オタクに未来奪われるな・・・」

作者「俺泣きそうになってきた・・・」

「・・・だつたらわざと勉強しろよ」・・・」

龍騎「こいつが勉強しない理由はけおーーの沢唯でも高校に行けるから平気って言つ最低の理由らしい・・・只の駄目人間だろ？」

村瀬「そんな根拠も無いことで？」

佐藤「勉強しないの？あり得ない！？」

安西「今日は高校の見学会に行つたのに勉強してないぞ？」

八雲「可笑しいだろ・・・普通説明会行けばやる氣出るだろー？」

安西「それどころが説明会に行くのすら嫌だったらしく・・・やる氣がなさすぎる・・・」

作者「言いたい放題だなお前ら・・・」

龍騎「ちょっと話し変わるがこいつは文章力無いのに、次回作候補が四つもあるらしい・・・」

村瀬「アイディアまでは、人並なのに文にすると猿以下・・・」

佐藤「自分では何故か自信あるアイディアだけ皆さんと結構かぶつてるし、文章が力不足だから駄目でしょどいつせアタシたちみたいに酷い作品になるに決まってるよ！」

八雲「ここから生み出されるキャラクタリ・・・本当に可哀相だ」

龍騎「大体俺らのキャラクターの名前で精一杯なのによく作る氣になるな・・・」

村瀬「しょうがないですよ糞作者ですか？」

作者「お前ら酷過ぎる・・・お前たち一良く考えろーー！」

「・・・何をだよ駄文男」「・・・」

作者「むしろ俺じゃなければお前たちは書けなかつたんだぞ？俺の文章力の低さのお陰でお前たちは活躍できるんだ！感謝しろーーー！」

龍騎「お前じやなければなあ・・・」

村瀬「もつと迫力ある戦闘シーンと素晴らしい演出に・・・」

八雲「工夫されているキャラクターの設定に・・・」

佐藤「毎回ドキドキする展開と上手な会話文に加えて・・・」

安西「人気もあつたはず・・・」

作者「えつ？つまり・・・」

「・・・お前じやない方が面白いんだよ・・・」

作者「酷すぎるとだらーーー！」

龍騎「当然の結果だ」

村瀬「こんなに書いてあの文章力は・・・」

八雲「全く上達しない・・・」

佐藤「アタシも何時までこんなぎこちないツンデレ発言を・・・だからアタシはツンデレじやないつー龍騎君は・・・ちょっとは好きだけど・・・そういう意味じや無いー！」

龍騎「相変わらず下手くそだな・・・」

八雲「もつツンテレは諦めりよ、少しも萌えない」

作者「ごめん・・・」

安西「自分のキャラに謝罪つて・・・」

龍騎「プライドも無いのか・・・」

八雲「知つてたけど、最低だな」

作者「座談会なんてやらなきやよかつた・・・」

村瀬「しかも自分で書いてるつて」とは、相当自分が酷い人間つてわかつてるんですね」

作者「知つてたよ、俺がかなり酷い人間だつても・・自分のキャラに馬鹿にされるとは・・・」

「・・・これ書いてるのもテーマじゃねえか」「・・・」

作者「ちよつと落ち込んでくる・・・」

龍騎「さて、こんな作者に変わつてここで読者とこの名の神様に感謝したいと思います」

村瀬「こんな作品をいつも読んでくれてありがと『ありがとうございます』

八雲「いつもアクセス数を見て驚いています」

安西「皆さんの応援のお陰で連載を続けることが出来ています」

佐藤「これからも応援してください別に嬉しい訳じゃないもん
つー」

「「「「相変わらず下手だな・・・」」」

龍騎「とこう訳で、これからもこの駄菓子作者をこれからも鍛えるの
で・・・」

「「「「応援お願いします！ーーー」」」

作者「僕からもお願ひしますーーー」

「「「「戻つてきやがった・・・」」」

番外篇　皆で座談会（後書き）

滅茶苦茶でしたね・・・でもこれだけは言わせてください。これらも頑張るので応援宜しくお願いします！

第壱拾九話 二人の本氣（前書き）

結局、三人旅をすることになった龍騎。これから彼らに何が待ち受けているのか——

第壹拾九話 二人の本氣

龍騎達三人は街を出て、道なりに歩いていた。当然龍騎と村瀬は手をつないで歩く。しかし今日は龍騎の歩調がいつもよりもかなり遅い。

「内蔵・・・やられて・・・歩けないかも・・・」

「龍騎、大丈夫？けど油断するからだよ？」

「戦っている間に他のことに気を取られるだなんて・・・あり得ないは！」

二人に怒られる龍騎。正直今は誰と戦つても負ける気がする。無事に腹の調子が良くなるのを待つしか無い。だが治るのにはしばらく時間がかかりそうだ。

「栢さん、歩くときってどうして必ず手を繋ぐんですか？」

「恋人だから」

二人に綺麗に答えられてしまつた、佐藤。しばらく佐藤の手は棍を握り続けるしか無いようだつた。

「栢・・・今襲われたら頼むね・・・」

「大丈夫、たまにはゆっくり休んでね」

「アタシには任せてくれないの？」

「美穂も・・・頼むは・・・」

「アンタのためにじゃなくて、栢さんを守るためだもん！」

そんな冗談のつもりで言つていたことが、当たるとは思つていなかつた。逆の道から頭に頭巾を被つた男たちが歩いてくる。

「山賊・・・でしょうか？」

「アタシと栢さんなら楽勝だね！」

男たちはこちらに気づいたのか近づいてくる。かなりの人数だ。

「お前ら・・・金を寄こせ！」

「あなた方に渡すお金など御座いません、お引取りを」

「だつたらその武器を置いていきな・・・」

「アンタなんかにアタシの棍は絶対触らせないから!」

「ならしうがねえ・・・その身体でも貰おつか!」

「貴方に捧げる身体など御座いません」

「面倒だな・・・お前ら!やつちまえ!!」

龍騎が黙っている間にいつの間にか戦闘になってしまった。

「龍騎は下がつてね、必ず守るから」

「行くよ!栄さん!!」

「ええそうね龍騎は・・・」

「必ず守るっ!!」「

「頼んだぞ・・・」

龍騎がそういう時には一人はそれぞれ得意な場所に移動した。村瀬は後ろから佐藤を援護し、佐藤は棍を持ち前に出て敵の頭数を減らしていく。山賊ではまるで相手になつていれない。村瀬も一発も外すこと無く正確に直撃させ、佐藤も勢い良く飛び込んでは敵を吹き飛ばしていた。

「こんなものですか・・・甘いですね・・・」

「全然楽しくないよ!もつと来なよ!!」

挑発に乗つたのか、男たちが次々と飛び出してくる。しかし村瀬が増援を潰した。

「村瀬流奥義 破魔矢・・・」

天から急降下した、鉄の矢に男たちは次々とやられていく。佐藤も負けてはいなかつた。

「饗饌流奥義 天穴!」

一度に何人の男を巻き込んで吹き飛ばしていく。次は棍を自分の上で回転させた。

「饉饌流奥義 地碎衝!」

村瀬と佐藤の周りには次々と男が倒れていった。

「二人の女の子にやられるなんて、恥ずかしいですね」

「そろそろ、決めましょう!栄さん!!」

佐藤が山賊の塊に突き進んでいく。村瀬にある策が思いついた。難しいが佐藤ならやつてくれるだろう

「美穂ちゃん！頼むね！」

限界まで溜められた破魔矢が飛んでいく。しかしそれは佐藤の前で落ちていった。その瞬間佐藤は何をすればいいのか直感する。

「任せてください！必ず決めます！」

佐藤が地碎衝の構えを取る。ここまででは計画通りだがここからが難しい、角度を間違えると失敗するからだ。それでも村瀬には確信があつた。決めてくれると。佐藤が棍を振り下ろした。

「一重奥義！！ 破碎衝！！！」

佐藤は破魔矢で高速で落下してきた矢に、地碎衝をぶつけた。これにより矢の角度が山賊の方向へと向く。破魔矢と地碎衝が合わさつた、この矢を止めるわけがなかつた。最後の山賊たちも全てこの一撃で倒れた。二人の完全勝利である。

「流石美穂ちゃんね、決めてくれて有難う」

「いえいえ！栄さんの破魔矢が上手だからですよ！」

「二人とも・・・ありがとう・・・強かつたよ・・・」

「だつて、大切な龍騎のため・・・」

「こんなところで死なれても困るからね！」

「「ちょっと本気を出したんだよ」「」

思わず顔が赤くなる。二人とも可愛くて龍騎に取つては大切な二人である。これ以上戦わないはけには行かない。一人のためにも負ける訳には行かない。決意と、覚悟を新たにする龍騎。しかしまだ龍騎は気づいていなかつた。この地方最強の流派・・・鎖鎌を使う流派が龍騎を狙つていたことを・・・

第壱拾九話 一人の本氣（後書き）

今回は短めです。たまには村瀬にも戦わせてあげようと思つて書いてみました。そろそろこの第弐部も終わると思います。この後は完結編の第参分を書いたら本編は終わると思います。

前回の番外編はどうでしたか？これを書いた日がアクセス数かなり高かつたので、自虐ネタを使って良かったです。

ユニークのアクセス数がお陰さまで1300を超えるました。本当に有難うございます。まだまだとは思いますがこれからも応援宜しくお願い致します。

第弐拾話 強すぎる流派（前書き）

三人で旅を続けていた龍騎。しかしその頃彼らはある流派に狙われ始めていた。

第弐拾話 強すぎる流派

先の村瀬と佐藤のお陰で何とか腹の調子も回復し、無事に戦えるようになつた龍騎だが回復してからは誰とも戦わずひたすら歩くだけになつてしまつっていた。

「何で誰も居ないのかな～折角戦いにこんな所まで来たのに・・・」「まあまあ、その内戦えますよ、楽に行きましょう」

龍騎と村瀬の会話を黙つて聞いてる佐藤。実はこの一帯には異常に強い流派がある。その事を知つても中々話せなかつた。恐らく話せば龍騎は戦いに心踊らせるだろう。だがその流派は本当に強いのである。そしてとにかく数が多い。話すか話さないか迷つていた。

「美穂どうした？考え方？らしくないぞ？」

「う、らしくないってどういう事よ！ア、アタシだって色々考へるんだから！それより、龍騎君に聞いて欲しいことがあるの！栄さんも聞いてください」

「何だよ、言つてみろ？」

「どうしたの？美穂ちゃん？」

あまり言いたくなかつたが言つしかなさそつだ。佐藤は覚悟を決め る。

「こ^くの辺には・・・現段階最強の噂もある・・・鎖鎌を使う流派、神凪流^{かんなぎりゅう}がいるの・・・龍騎君だつて聞いたことぐらいにあるでしょ？」

鎖鎌は、長い鎖の先端に鉄で作られた武器を取り付け、後ろから鎖を操作して扱う武器である。

「ああ・・・神凪か、聞いたことはあるぞ。かなりの大規模な人数で襲うんだつてな。それも強いの狙いで徹底的に・・・」

「神凪の名が有名になつたのは少し前の大会で彼らが途中乱入して他の流派の人間全員を殺したんですよね・・・頭首は残忍な性格のため、武神戦には出れない程の危険人物・・・」

「一人とも顔が強張る。鎖鎌は一発当たつだけで致命傷となる。

「ここは、通らない方がいいよ？ その……龍騎君の事が心配だから……」

珍しく佐藤が素直に龍騎に忠告する。龍騎が一瞬笑顔になつた瞬間——その笑顔は壊された。上空から振つてきた鎖と鉄の塊に寄つて唐突に終わつた。

「美穂……遅かつたみたいだな、大丈夫必ず守るから、栂……頼むね」

「任せてください！ 必ず……守りりますから！」

「ア、アタシも行くもん！ その……栂さんが心配だから！」

龍騎たちを取り囲むように次々と敵が現れてくる。軽く見ただけで壱百は超えている。式百以上いるかもしだれない。その時正面から声がした。その声、その男からは今まで龍騎が体感したことのないよう圧力を放つていた。

「ここにちは、武神と仲間の皆さん。私は神凪流の頭首の渡部卓哉たくやとあります。残念ながら我々は公の場で武神決定戦が出来なくてですね～貴方達にはここで死んでもらいます。抵抗してもかまいませんよ？ この数相手に勝てるなら……」

龍騎に戦慄が走る。あの男は危険だ、そう身体が告げる。立つているだけで飲み込まれそうな迫力である。それは一人も感じていたようだ。顔が怯えているように見える。

「二人とも……嫌なら逃げてもいい。俺は最期まで戦う」

「何言つてるんですか？ 死ぬなら私も一緒にです」

「少し手伝つてあげる……別に助けたいわけじゃないもんね！」

「そつか……二人とも！！ 生きて先に進むぞ！！」

龍騎が叫んだ瞬間三人は三角形を作りお互いの死角を消した。しかし全方位から鎖鎌が降つてくる。三人は散会し、唯一遠距離攻撃のできる村瀬は、敵の攻撃中の隙をついて射てるだけの弓を放つて、頭数を減らす。しかしあまり減つた気はしない。数が多くすぎる。龍騎と佐藤は目の前に飛んでくる鎖を躊躇しながら敵の海に突っ込んで

いく。鎖鎌は外れると隙が大きいのでそこを付いていくしか無い。龍騎と佐藤は最前列の敵を片つ端から斬つて行く。神凪の人間は、接近されると距離を取りながら、鎌を投げてきて出来るだけ被害を減らす完璧とも言える戦略で三人を追い詰めていく。村瀬が隙を作ろうと矢を放つても、目の前で鎖鎌を回転させられ弾かれる。攻守一体の強力な武器である。

「取り敢えず、下つ端はその内壊滅するな・・・まあいいこっちにはまだまだ人はいる。それに・・・残してあるのは全員専用の鎖鎌を持つている、熟練者だしな・・・」

余裕の表情で啖いている渡部を氣にもとめず、とにかく敵を切り裂き続ける龍騎。龍騎の左手が腰の刀を探る。兄の力を借りることにした。

「兄さん・・・少し刀借りるね、神鳴二刀流・・・行くぞ!—」

佐藤も一人ひとり倒すのではなく、出来るだけまとめて数を減らしていく。それでもキリがない。三人に徐々に「諦め」の文字が浮かぶ。それでも三人とも戦うことを止めようとはしなかった。それぞれに譲れない想いがある。守りたいもの、守るべきもの、想う人のために一一三人の武が覚醒を見せる。

第弐拾話 強すぎる流派（後書き）

第弐部はこの戦いが終わったら大体終りになると思います。この戦いでは龍騎の好敵手の彼が戻ってきます。お楽しみに。

何時も応援有難う御座います。感想など待っていますのでぜひお願いします。これからも応援宜しくお願ひいたします。

第武拾壹話 四天鎌の猛攻（前書き）

神凪流と激戦を始めた三人、三人はこの驚異を打ち破ることが出来るのか――

第弐拾壹話 四天鎌の猛攻

大軍と戦闘を開始してかなりの時が経とうとしていた。三人とも疲労は溜まっているが、致命傷を受けずに何とか数を減らしていく。それでも最初の頃に比べ動きは鈍り始めていた。徐々に鎌にかかる数が増えていく。疲れているのは明白であった。後ろで渡部がほくそ笑む。

「さて・・・そろそろお前たちの出番かな？あいつらで勝つてもつまらん。専用の鎌を扱うことを認めた四人の鎌使い——四天鎌よ」
彼の後ろで四人の男たちが立っていた。一人が告げる。

「我々は何時でも準備は万全です。全ては貴方の為に——」
彼らは、最初に襲ってきた者たちを束ねる部隊長な役割をしている。そして彼らは、自分専用の鎌を開発し、使用することを許される神凪の猛者四人。これが四天鎌である。

「皆の衆、鎌を引けッ！下がって良い！！後は四天鎌に全てを任せろ！！」

大軍は大人しく鎌を引き、後方に下がって行つた。龍騎たちには意味が分からぬ

「引いた・・・だと？何が起こる・・・」

「けど・・・四天・鎌って？・・・」

「分からぬけど、きつと相当・・・強いと思います・・・」

奥から四人の男が出てくる。真ん中の男が言った。

「我ら四天鎌、貴様らを全力で排除する！」

龍騎は思わず呟いた。

「三人相手に、四人の猛者かよ・・・」

「そんな事言つても・・・取り敢えず適当に別れましょー」

「皆・・・アタシの棍で吹き飛ばす・・・」

そう言つて、二人は左右に別れていった。そして取り残された龍騎はまとめて一人の相手をしなければいけなくなつた。さすがの龍騎も辛そうだ。それは当然村瀬と佐藤も同様であつた。

村瀬の相手は、鎌の途中から五つに分かれている鎌を投げ、それぞれが互いにぶつかることで、鎌同士が不規則に揺れて落ちるという鎌でその姿からか「乱舞鎌」らんぶがまと言つらしい。使い手の名前は将斗と名乗つていた。この鎌はかなりの曲者で、毎回違う動きをする鎌に対応するのは難しい。相手自身を狙つても、距離があるので躰される。矢を曲げても同じだつた。仮に上空に放つてもたたき落とされるだけだらう。

「さて・・・どうやつて倒しましようかね・・・」

村瀬は打開策のないまま戦いを続けていく。

佐藤も苦戦していた。こちらも鎌が五つ付いてるがこちらは独立しておらず、固定されている。つまり通常の五倍の攻撃範囲と威力を持つていた。名はその名の通り五連鎌ごれんがまで使い手は、憲と言つていた。・・気がする。そんな事覚えていた余裕は、佐藤には無かつた。あんな破壊力のある鎌相手に棍を使えば、棍は一瞬で碎けるだらう。そんな事出来ない。近づこうにも、鎌が短く小回りがきき、使い手が驚異的な筋力で鎌を振り回しても近づけそうにはない。

「これは・・・厳しい・・・勝てるかな・・・アタシに・・・」

不安を感じながらも、敵に立ち向かっていく佐藤。引く気はなかつた。

龍騎は、二人を相手にしていた。しかし一人はこちらが近づくまでも何もしないので実質は一対一だつた。まだ、彼の鎌の特性は分からぬ。ここまで温存しているのだろう。

「絶対何か隠してる・・・危険だな・・・」

その時、ここまで隠された敵、名は雄也の鎌が本気を見せた。途中までは変哲のない鎌だが急に蓋が開き——中から無数の小さき鎌が飛んできた。

「こんなのありかよつ！？」

龍騎も驚きを隠せない。無数に増殖した鎌が、龍騎を襲う。避けられない状況。刀を壊されるのを覚悟したその瞬間——横からの強い力で龍騎は吹き飛ばされた。しかしこれは佐藤のものではない。別な人間に寄るもの。そして上を見ると意外な人物がそこにいた。

「久しぶりだな龍騎。こんな所で死ぬ気か？」

「久・しぶり・・・だな蒼真・・・何のようだ？」

かつて龍騎と同じ、刀で龍騎と戦つた好敵手である安西やすにし 蒼真そうまが居た。昨日の敵は今日の友とは良く言ったものだと龍騎は内心思っていた。

「龍騎、立て。ここで負けたくないだろ？・奴らを・・・倒すぞ！」

「しょうが・ねえ今だけ・・・お前と一緒に・・・戦つてやらあ！」

二人は並んで刀を前に突き出した。四天鎌の一人に、そして後ろの頭首に——

「行くぞ！必死——倒す！」

龍騎の心に燃える何かがあつた。闘争心が湧き上がる。こいつの隙で負ける訳には行かない。それは蒼真も同じだった。互いに実力を認めた者どうしだから出来る連携が炸裂する——

第弐拾壹話 四天鎌の猛攻（後書き）

久々の更新です遅くなつて申し訳ありません。色々大変ですが頑張つて更新しますのでこれからもよろしくお願いします。

蒼真も助けに入り、盛り上がりってきたーーと思つていてる作者です。神凪との決戦は後三話ほどで付くと思います。

何度も言つておりますが、第弐部が終われば第参部に移行予定です。まだ殆ど何も決めていませんが・・・これからも応援宜しくお願ひいたします。

第弐拾弐話 四人の反撃（前編）（前書き）

蒼真の助太刀により、息を吹き返した龍騎。村瀬と佐藤もついに反撃に出る——

龍騎、村瀬、佐藤、安西はそれぞれ別れて、神凪流が誇る四人の精銳、四天鎌と戦っている。誰も倒されないが、誰も倒せない。まさに一進一退の攻防である。

村瀬は鎌どうしがぶつかり、不規則な動きを産む乱舞鎌と戦っていた。こちらも矢を何本も放っているが当たらず、微妙な攻防が続いた。さらに村瀬は四天鎌の前の雑兵から戦つており、明らかに疲れていた。村瀬の顔色は良くない。

「このままじゃ・・・負ける。どうすれば・・・」

降り注ぐ鎌を見ながら考える。矢に今までより大きな力を与える必要がある。その方法を考える。そして、唯一の打開策が頭に浮かぶ。村瀬流の大技。今まで成功したことは無い。それでも決めなければならぬ。出来なければ死ぬ。の人と一度と話せなくなる。それだけは嫌だ。村瀬は決めに行く。

「昔、ある人は言つた。一本の矢は脆くても三本にすれば折れない」と。それを再現したあの奥義を必ず決めてみせる・・・」

独語した村瀬は破魔矢に使う先端が鉄でできている矢を、三本取り出した。それを同時に弓に構える。幅も狭く弓が重さに耐えきれず悲鳴を上げる。それでも村瀬は構わなかつた。村瀬流の頭首に伝わる一子相伝の技を、ついに見せる。

「村瀬流・・・秘奥義・・・昇竜流星群！」
しょうりゅうりゅうせいぐん

三本の矢が天空へ羽撃ぐ。空に舞つた矢は、地上を向き流星群のように降り注ぐ。それを落ちてくる前にたたき落とそうとして、乱舞鎌を投げつける。しかし三本の矢が密着して力が合わさつた矢を簡単に弾くことは出来ない、その隙に――敵の将斗の腹に何かが突き刺さっている。それは当然村瀬の放った矢である。昇竜流星群に気を取られて、村瀬を見るのを忘れていた。その間に村瀬は落ち着い

て矢を取り出し彼に向かって矢を放っていた。彼の腹から血が飛び出してくる。その場に崩れ落ちた。村瀬が掴みとつた薄氷の勝利である。

「龍騎・・・私勝ったよ・・・」

笑顔で満足気に言うと村瀬は力なく地面に倒れた。

その頃佐藤は五連鎌に潰されないように神経を研ぎ澄まして動きを見切っていた。しかし近づくことは出来ない。あの鎌は他のものより鎖が短く、隙が小さい。それにより中々佐藤は飛び込んでいけない。

「何なのよ、あの鎌・・・すぐに倒してやるんだから・・・」

心のなかでは強気だが、中々そうは行かない。あの鎌を躊躇して一気に間を詰めなければいけない。難しい問題である。横に躊躇すより・・・上に逃げることを思いつく。しかしそれは相手の動きをしつかり読まなければ失敗してしまう。しかし村瀬同様負ける訳にはいかない。本当は好きな人とまた笑い合うためにも、引くわけには行かない。

「り、龍騎君のためにちょっと全開で行く・・・」

憲を見定め真正面から走っていく。そして鎌が佐藤に当たる直前、佐藤は棍を地面に挿して一気に上空に舞い上がる。その高さは五連鎌の攻撃範囲より僅かに上である。つまりこの間は確実に佐藤有利である。しかしそんなの一瞬で終わる。決めるのは一回だけである。

「とつておき・・・見せてあげるんだから・・・」

憲の真上まで行くと、天穴の様に、棍を螺旋状に回転させる、しあこの技は最後に、右手の手首を棍と同じ方向に回すことと、更に回転を増す。そして超回転を掛けた棍が佐藤の手から離れる瞬間佐藤は吠えた。饗饌流の奥義の名を。

「饗饌流・・・秘奥義！ 桜花螺旋撃！！！」

放たれた棍は、敵の頭蓋骨に直撃し、勢いと、回転で頭蓋骨を破壊していく。そこに佐藤が地面に降りる前に棍を更に押し込む。

「これでえ・・・決まりだあっつ！」

彼の頭蓋骨が砕けた音がした。そして最後に吹き飛ばした後、もう憲は立つことはなかつた。

「倒せたんだから・・・負けたら許さないんだからね・・・」

村瀬と同じように力尽きて地面に倒れた。

龍騎と、安西は敵の途中で鎌の中から無数の小さな鎌の出る増殖鎌に手を焼いていた。

「一人は無事に勝つたみたいだな・・・」

安西が告げる。龍騎はむ胸をなで下ろした。

「一人とも・・・勝つてくれて良かつた・・・」

こうなると一人も負けてはいられない。闘志を燃やす一人。

「あの二人は死にましたか・・・まあ四天鎌の雑魚ですからね、彼等は・・・」

二人を苦戦させている増殖鎌の使い手が余裕の表情で喋る。もう一

人は動く気配がない。二人が言う。

「お前等は・・・俺らが必ず倒す！」

二人の反撃が始まる――

第弐拾弐話 四人の反撃（前編）（後書き）

結局、二つに分けることにしました。まず一人の反撃です。次回は安西の新技も見せれると思います。

更新遅れてしまふ。次回からはもう少し早く書けるように頑張ります。

これからも頑張って書いていくので応援宜しくお願ひ致します。

第弐拾參話 四人の反撃（後編）（前書き）

四天鎌の猛攻から、反撃に出た村瀬と佐藤。龍騎と安西も四天鎌を打ち倒すことが出来るのか――

第弐拾參話 四人の反撃（後編）

龍騎と安西は四天鎌の一人、雄也の操る増殖鎌と戦っていた。鎌の中から別な鎌が一斉に放出されるこの鎌相手では流石の一人も手を焼いていた。

「蒼真・・・こいつは厳しいな・・・」

龍騎が辛そうに話す。彼は四天鎌と戦う前から戦つており疲れが溜まっているのだろう。

「龍騎、なら下がつてろあいっは俺が斬る」

そう言いつと安西は雄也の前で一呼吸置いたあと、雄也に向かつて飛び込んでいった。

「死ぬなよ・・・蒼真・・・」

龍騎がそつと咳く。この声は蒼真に聴こえることは無かつた。

安西は雄也の近くまで走つて行くと雄也は増殖鎌を放つてきた。

「！」の鎌がある限り・・・俺は負けませんよ

安西の目の前に無数に襲つてくる鎌が見える。しかし彼は動搖を見せることが無く回避した。

「俺の本気を見せる・・・蘇澳流奥義 水面みなも」

彼は一瞬立ち止まつたあと、静かに鎌の真横にまで移動した。

「疾い！全身の力を一瞬全て抜いた後に膝の力を一気に使って急速に躲した・・・」

離れてみていた龍騎が驚愕する。やはり彼は並外れた強さだった。

そのまま一気に間合いを詰める安西はとうとう刀の間合いにまで入つていった。

「さて、これで終りにする・・・」

安西が間合いを詰めると雄也は慌てた様子で後ろに飛ぶ。どうやら次の鎌を投げる準備をしている様子だった。しかし安西にはそんなのを待つ義理はない。勢い良く刀を抜刀し、そのまま雄也の足元を狙つた。しかしその初段は完全なる囮であつた。

「蘇澳流奥義 燕」

足首辺りまで行つた刀が、彼の手首のちょっとした動きで一気に首筋まで飛んでゆく。まさにその動きは空を自在に飛ぶ燕の様であった。この技を避ければほど雄也は強くない。燕を受けてそのまま命を落としていった。そして最後の四天鎌がついに動いた。

「他の四天鎌を全て倒したか・・・だが俺はこいつらと違つて弱くない」

「絶対、ぶつ倒してやるよ！」

龍騎が吠える。彼の体力は充電された。

「行くぞ蒼真あいつを潰す！」

二人は彼に飛び出した。彼は鎌で攻めることは無い。相手が近くに来たときに両手の鎌を回転させるだけである。たつたこれだけなのに他のどの四天鎌よりも強い。何故なら守りが堅く崩せない。無理に行つても刀を壊すだけである。だから一人とも攻めあぐねている。彼、涼平の双竜鎌である。前後左右上空も抜かりなく防御できるその防御性能の高さと、的確に鎌を動かす彼の力は流石は四天鎌最強の男と言つたところであつた。一人とも攻撃できずに近づいては引くことを繰り返すしかない。

「神鳴の・・・秘技なら、敵の隙を生むあれだつたら・・・」

龍騎は、彼を倒す方法を考えていた。そして一つ試してみたい方法が浮かんだ。

「蒼真、少し下がつてくれ、後は俺に任せろ」

今度は龍騎が突っ込んでいく。当然涼平の双竜鎌は回転したままである。

「まずはあの鎌の片方を崩す、その後は相手次第だ・・・」

涼平の前で抜刀させた龍騎がついに動く。刀を握つていらない手で刀を持つていてる手を弾いた。

「まず一発目だ！神鳴流奥義 朱雀！」

剣速が加速された刀は鎌に向かっていく。更に龍騎は空いている手で刀を螺旋状に回転させた。

「朱雀だけでは終わらない！喰らえ神鳴流奥義 八咫鏡！」

回転も追加された刀は鎌に触れたその瞬間——

「鎌が刀の回転に巻き込まれたつ！？」

涼平に動搖の色が見える。円を描いていた鎌は龍騎の刀が当たった瞬間彼の螺旋状に回転する刀の動きに飲み込まれるように絡まつていった。これで双竜鎌の一つは使えない。一気に詰め寄る龍騎。それでも涼平には未だ一つの鎌が残されている。ここで油断してはこちらが死ぬかもしれない。龍騎に教えられた神鳴の新たな奥義を使う。

「神鳴流秘技 雲霞くもがすみ！——これで最後だ！」

一本目の刀を抜き、上段から振り下ろそうとした刀は突如涼平の視界から消えた。腕は振られてるのに。明らかに動搖していた涼平。そして振り下ろした勢いで地面まで沈み込んだ龍騎の手には——消えたはずの刀があつた。龍騎は右手で、涼平の身体に、刀を挿し込み、両手で刀を首元まで上げて彼の命を断ち切つた。倒れた涼平の後ろに立っていた、渡部には両手で刀を握り、鬼の様な気迫を吐き出している龍騎が見えた。

「龍騎……あれはいつたいどうやつたんだ？」

今度は後ろに下がつていた安西が聞く。龍騎は素つ氣無く答えた。

「雲霞か？あれは上段斬りの途中で刀を握っている手を離すんだ。そしたら刀は勢い良く地面にまで落ちるだろ？そして刀と一緒に自分も身体を一気に沈めて落とした刀を取る。そしてそのまま相手を斬るんだ、まあ神鳴の奥の手だ。だからこの技は奥義じゃなくて秘技つて呼ばれる」

言い終わった龍騎は、斬り倒した涼平の後ろにいる男に目を向ける。

「さて……決着をつけるぞ！」

「ええ……どちらが武神に相応しいか、最後の殺し合いです」

龍騎達四人と神凪流との決着の時は近い——

第武拾參話 四人の反撃（後編）（後書き）

これで四人全員反撃しましたね。何とか四人とも新技を出せて良かったです。そろそろ人物紹介も更新するのでそちらも見てみてください。

今回の龍騎の技はちょっと無茶があつたかもしませんね、分かりづらいところなどがあつたらメッセージを送つてくれれば出来るだけ解説したいと思いますのでぜひお願いします。
これからも応援宜しくお願ひ致します。

第三弐拾四話 一騎討（前書き）

四天鎌全員を倒した龍騎達。ついに渡部との一騎討が始まる――

四人それぞれが一人ずつ四天鎌を打ち破つた龍騎達、残すはあと一人頭首の渡部卓哉だけである。

「蒼真、お前は下がつてろあいつは俺が倒す」

龍騎がそう言うと安西は大人しく後ろに下がつた。これで一騎討の準備は整つた。ここまで闘い抜いた皆の思いを無駄には出来ない。どんなに強くても必ず勝とう、と決意を固めた龍騎。

「まさか、全員倒されるとはな・・・予想外だよ・・・」

そう呴きながら鎌を構える渡部。見たところ彼の鎌に特徴はなく自分の鎌に対する自信が見える。

「俺達を狙つたこと・・・心底後悔させてやる、あの世でなつ！」

最早龍騎に遠慮は無い。渡部曰がけて一気に走つて行く。

「さて・・・武神君は自分の手で殺さないとね・・・」

だるそうに鎌を回しながら渡部は呴く。龍騎とは正反対である。龍騎の場合感情を前面に押し出して戦うが渡部は心境を相手に見せることはなく淡々と鎌を操つて龍騎の攻撃をしのいでみせた。

「やっぱ刀で突進は難しいな・・・さつきのように雲霞はもう使えないだらうし・・・」

心のなかで独語する龍騎。その時攻めを見せなかつた渡部が攻めを見せた。右手のみで鎌を操り上空から降らす。その鎌だけに意識を向けすぎたのが仇となつた。渡部の左手から別な鎌が飛び出してくるのが見えた。鎌の二段攻撃だった事に龍騎は気づくのが遅れた。間一髪でかわしたはいいものの龍騎は渡部の力を見くびつていた。地面に触れる少し前に鎌が開き無数の小さな鎖が龍騎を襲つた。

「嘘だろ！？分裂鎌だと・・・間に合わない！」

無数に分裂したうちの幾つかが龍騎の身体に直撃した。肺から空気を吐き出す。

「どうだい？俺の開発した元祖分裂鎌の威力は？もともとあの四つの鎌は全て俺が設計したものだ……あいつらは俺の作ったものを貸してもらつているだけ。あの四つをもつとも上手く使いこなせるのは……俺だ」

吹き飛ばされた龍騎に休む暇はなかつた。もう一度右手を高く上げ鎌が振つてきた。慌てて起き上がり鎌の直撃は防いだもののそもそも分裂鎌での痛みが激しかつた。

「骨何本かは折れたな……この調子だと負けるか……」

龍騎は若干ふらついた足で渡部に向う。

「誰が……お前なんかに負けるかよ……」

「そんな弱々しい声で言われても困るな～楽にしてやるよ」また上空から鎌が降つてくる。しかし龍騎はそれを待つていた。疲れている足に力を込め一気に加速する。当然体中が痛いがさつきのは油断させるための演技だ。

「もう動けないなんて……誰が言つたんだよ！」

今度部は右手は鎌を投げていて使えない。だからそのまま右手に向かつて突っ込んだ、そこで加速を加え背後まで回る。骨が軋むがそんなこと気にしている場合ではない。

「後ろに回つて……勝つたと思うなっ！」

左手の鎌が龍騎に向かつて飛んでくる。後ろに目があるかのように正確に飛んだ鎌は龍騎の左肩に直撃し肩が砕ける。もう左手は使えない、しかしそれも関係ない。

「喰らえ！これが俺の！兄さんの！神鳴の力！神鳴流奥……」

体の動きが止まる。これまでの戦いの蓄積と今回の疲労、そして分裂鎌の直撃に左肩も壊された。満身創痍の龍騎に動く気力は無い。その時煌輝の声が脳裏によぎつた。

「神鳴の子なら……最……後ま……で負ける……な」

消え行く命で最期に言つた言葉。まだ龍騎は勝つていない。どうせ死ぬならあいつも道連れだ。力を振り絞る龍騎。鎌を一周させ再び龍騎のもとに放つ渡部。一人の咆哮がこだまする。

「神鳴流奥義 極の型 虚陽！」 「！」んな餓鬼！」ときには…」

龍騎の刀は渡部の背中に、渡部の鎌は龍騎の腹に、それぞれ直撃した。その時田を覚ました村瀬が驚愕する。龍騎が一吹き飛ばされていた。

「嘘だ…・・龍騎？ そんなことつて・・・龍騎！！」

悲痛な村瀬の叫びと共に龍騎達と神凪流との戦いは幕を閉じた。

第弐拾四話　一騎討（後書き）

何か・・・すいません。待たせたのにあつとこづ間で渡部の出番が終わつてしましました。鎌の武器の特性上技つて考えにくいんです。だから鎌の種類でその穴を埋めようとしたんですが四天鎌のアイデイアで精一杯でした。すみませんいいわけです。頑張ります、次回で「龍騎神話編」も終わりです。多分第参部もやると思います、多分・・・

新作予定の「流れ星にハーレムの祈りを」（仮）ですが大体は出来てます。本當です。もう少しで完成します。どんなに遅くても来月の初めにはお見せしたいと思います。

長くなりましたが、申し訳御座いません。これからも応援宜しくお願ひします！

第弐拾五話 終わりと始まり（前書き）

一騎討の末相打ちに終わった龍騎と渡部。龍騎が倒れたことは旅の終わりを意味する。彼らはこの先どうなるのか――

第貳拾五話 終わりと始まり

「ねえ龍騎、目を覚ましてよ・・・起きてよ・・・」

村瀬の悲痛な声が木霊する。龍騎は目を覚まさない。心臓が動きを止めているわけではないが出血が激しく、不安定な状態だった。

「立ちなさいよ・・・まだ言いたいこといつぱいあるんだからっ！」

佐藤も声を上げる。二人とも傷ついた体で精一杯龍騎を介抱した。

「まだ、お前との決着は付いてないだろうが・・・」

安西が呟く。彼も龍騎を心配していた。そしてそのとき龍騎は不思議な空間にいた。

「ここは・・・どこだ？ 一面が白い・・・ここが黄泉の国なのか・・・」

彼は周り全てが白い空間にいた。何も無い白い空間に。自分以外の人や建物は無く只一人でそこにいた。彼は自分が死んだと直感した。

「俺の人生も・・・呆気なかつたな・・・」

彼は前に進んでいった。それでも誰もいないし何も無い。どこまでも続くかのような白い世界。だが世界の先、果てに見知った人間がいた。

「龍騎・・・来たのか・・・」

「兄さん・・・なの？」

そこにいたのはかつて自らが倒した兄、煌輝の姿があつた。

「俺は俺だ・・・誰かに負けたのか？」

「相打ち・・・かな？ 死んだかはわからないけどここにいるんだから死んだんだと思う。」

兄は小さく溜息を付いた。

「お前はまだ死んでない。だから戻れみんなのいる世界に」

「何言つてゐるのさ！？もう戻れないんだよ？」

龍騎の現世で使つていた体など何処にも見当たらない。それどころかさつきまでいた世界自体何処にあるのかわからない。戻れるはずが無かつた。

「現世はこの世界の下、つまり裏側にある」

「・・・裏側？」

「ああ そうだお前の足元に現世はある。」

龍騎にはさっぱり意味がわからない。

「どうしてそんなことがわかるの？」

「龍騎よく聞け、世界はすべて表裏一体だ。生と死、出会いと別れ、始まりと終わり、これは剣術にも当てはまる。攻めと守りのようにな」

「つまり・・・ここは死んだ世界だからその裏には現世があるの？」
「正確にはここにも生はある。ここでは精神が生き続ける。肉体は果ても精神がな、この世界の裏にあるのは肉体と、色の付いた世界だけだ」

「だったら今まで俺が斬つて来た人間や、ほかの死んだ人たちは何故ここにいないの？」

「現世で満足して精神が要らなくなつた人間は昇華される。だから昇華したんだよ満足した精神とともに」

「兄さんは・・・満足できなかつたの？」

「お前に、伝える」ことがあつたんだ、それだけが心残りだったそれを今から伝える」

「それつて・・・なに？」

「神鳴流 秘奥義 神鳴 最終奥義だ」

「それが心残り・・・」

「いまからすべてを教える・・・これが俺の全てだ・・・」

「そう、それが神鳴、極めの技だ」

完成した奥義に驚く龍騎がそこにいた。

「凄い・・・凄すぎる・・・」

「さて、そろそろ俺は行くかな・・・」

「兄さん待つて！もつと話してみたい！昇華したら会えなくなるんでしょう！？」

「そうだ、だけどそれでいいだろ？ひとつ終わりは新しい始まりを告げる。そうは思わないか？」

振り返つて歩いていく兄に手を伸ばす届きそうで届かない距離に兄はいた。

「じゃあな・・・現世で満足したら帰つて来い・・・」

手を伸ばした先に一瞬笑顔で振り返つたその直後――

「兄さん・・・さよなら・・・」

砂のよう静かに兄は消えていった。昇華された。この世から精神を解き放つて。

「俺も・・・戻るよ・・・戻るべき世界に・・・」

龍騎は足元を見て地面に飛び込んでいった。亡骸に精神が入り込む復活した。

「ただいま・・・戻つたよ

「龍騎！――！」「遅いのよー馬鹿！――！」

「心配掛けやがって・・・」

起きると三人の顔には安堵の表情が浮かぶ。

「悪かつたつて、もう大丈夫だ」

「兄さん・・・俺こっちで戦い続けて・・・昇華するよ、だから待つてて・・・」

龍騎は心中で独語した後立ち上がった。

「さて、強いやつに会いに行くぞ――！」

「――行きたくない！――！」

若き武神は今日も戦い続ける。死ぬまで、満足した生を送れるまで

――

第弐拾五話 終わりと始まり（後書き）

色々申し訳ありません！！

まずは更新が遅れてしまいません！！なかなか書く時間が見つけられなくて・・・本当にすみません！

次に超展開になってしまってごめんなさい・・・書いてて滅茶苦茶だとは思いましたが書ききってしまいました・・・ごめんなさい・・・第参部ですが・・・一応やります。舞台は・・・一年後ぐらいがベ

ースです。

ぐだぐだになつてきましたが、これからも応援ぜひお願ひします！

第武拾六話 次なる闘いへ（前書き）

限界を超えて勝ち抜いた龍騎。 龍騎、栄、美穂の三人は一度自分の故郷に戻ることにした。

第武拾六話 次なる闘いへ

「戻ってきたな・・・大神家に」

一人呟く龍騎。今彼は一人で歩いている。栄と美穂の二人はすでに自分の故郷へ戻つていった。栄は最初に会つた城に戻り、美穂は親のいる村に戻つていった。龍騎も久しぶりに親や門下生のいる故郷に戻つてきた。

「誰だ、そここの餓鬼。師匠の住むこの大神家に――」

門の前に仁王立ちする見張りの男に呼ばれる龍騎。どうやら龍騎の顔は忘れてしまつたようだ。

「忘れましたか？お久しぶりです。俺、龍騎ですよ？」

「りゅ・・・龍騎さんっ！戻つてきたんですか！お久しぶりです！」思わず安堵の溜息を付く。懐かしいところは居心地がよかつた。

「お前ら！龍騎さんが帰つたぞ！！出迎えやがれ！！」

男が叫ぶと門下生の皆が走つて一列に並び道を作り、声をそろえて

――

「――お帰りなさい！龍騎さん――」

「ただいま、皆久しぶりです。門下生が増えましたね・・・」

「流石！全員覚えてるんですか？」

「旅に出る前の門下生は覚えてるよ、吉武四人いましたね？」

神鳴流は門下生をとても大事にすることでの有名だ。門下生は大神家に泊まり毎日皆で飯を食べる。

「その通りです。今は参武五人まで増えましたがね」

「それは凄い・・・父上と母上と叔父上は？」

さつきから三人の姿は見えない。普段ならいるはずだが。

「の方たちなら今は席を外しております。もうそろそろ帰つてくると思いますが・・・」

「そつか、ところで皆ちゃんと強くなつたんだよね？」

笑顔で門下生達に聞いてみる。

「「「もちろんですっ！」」」

「そつか・・・じゃあ木刀で勝負しよう。一太刀でも入れれたら俺の刀をやるよ」

この一声に皆はやる気満々だ。落ちた木刀を拾い上げ、全員と戦うこととした。

「さて・・・皆、束になつてかかつてきなー」

「さて・・・もう終わりかな？」

「強すぎですよ・・・流石ですね・・・」

結果は龍騎の圧勝だつた。全員打ち負かされてしまった。

「皆、前より強くなりましたね〜」

そんな事を喋つていてる内に玄関に見知った人影が見えた。

「父上・・・母上・・・叔父上！」

「久しぶりだな龍騎、お疲れだつたな」

短い旅を終えた龍騎に、さらなる飛躍が訪れる――

第弐拾六話 次なる闇ごへ（後書き）

更新遅くなつてすいません、そのくせ短文ですみません。
ここからは後2、3話かけて第参部までの繋ぎを書きます。

もつ一方の勢いで書いてしまった作品と平行して書きますので更新
は遅くなるだらうと思いますが最悪一週間に一話のペースで書きた
いと思いますので応援お願いします！

第弐拾七話 村瀬の帰郷（前書き）

龍騎同様家に戻つた村瀬。さらなる高みへ修行を開始する——

第弐拾七話 村瀬の帰郷

「お帰り栂、旅はどうだった？」

「辛かつたけど楽しかったです、ちゃんと強くなりましたよ?」

村瀬家のある城へと帰郷した栂。久しぶりながら簡単な挨拶を交わす。

「それで何で戻ってきた?」

「龍騎の旅が一段落して彼は強さを求めるため故郷に戻りました。それで私も——」

村瀬はもつと強くなりたかった。龍騎が背中を預けられるほどに。「分かった……だが俺から教えられるのは後ひとつだけだ

「一つ……ですか?」

「そうだ、秘奥義を使えるようになつた栂には村瀬流最終奥義以外に教えることはない。」

村瀬最終奥義。古来から泣く子も黙るといわれた技だがこの技は何より使い手を選ぶ。よつてこの技を継承できたのは歴代の頭首の中でも数少ない。

「この技を覚えたとき——お前は大切な人の矢になれるはずだ」「分かりました、必ず極めて見せます——」

村瀬が最終奥義の修行に取り掛かっている頃龍騎は——

「流石父上……でも!」

父との仕合をしていた。誘つたのは龍騎本人。今まで勝てなかつたが全てを試すつもりで挑んだ。

「神鳴流奥義 虚蟬!」

龍騎が勝負に出る。相手の背後に回り込みそこから跳躍して空中に飛んだあと、そのまま斬り付ける大技にして得意技。

「俺がお前に負けるとでも?」

しかし龍騎の技は全て見破られてしまい・・・

「甘いんだよ！」

首に刀を突きつけられて敗北した。

「少しば強くなつたか・・・お前にはまだ教えてない奥義がたくさんある。だからまだ強くなる。」

「本当か！？ だつたら今すぐにでも教えてくれ！早く！」

龍騎は誰よりも強くなりたかつた。暇な時間など少しも無い。

「分かつたよ、じゃあ行くぞ！」

強くなるまでの道はまだまだ限りなく遠い――

第三拾七話 村瀬の帰郷（後書き）

遅くなつてすみません！遅れました！
展開が滅茶苦茶です！反省します！

最近この小説の書き方忘れました！誰か教えてください！
そんなわけでこれからも応援よろしくお願いします！

第一回 皆で座談会（大反省会）（前書き）

そのまんまです！去年やった企画ですが、覚えている人はいるでしょうか！？いる方は大感謝、いないかたはそちらも合わせてみてくださいね～（宣伝です）

第一回 皆で座談会（大反省会）

龍騎 「まざは皆さん・・・本当にすいませんでした！！！」

栄 「つかのカス作者が皆様に御迷惑をお掛けしました・・・」

作者 「本当にすいませんでした！！！」

龍騎 「まずはこいつなった経緯を語れカス」

作者 「今まで話を書いていたPCが去年ご臨終しましてね、私は父に修理を依頼しました。しかし・・・受験生にPCいいらんからwwwと一蹴され更新できませんでした」

栄 「何故10月まで放置したなんですか？4月の時点でPC復帰しましたよね？」

作者 「それは、難しい質問だね」

龍騎 「ネタなかつただけだろカス野郎」

作者 「ホント・・・すいません・・・」

美穂 「それで！？よつやく私の出番かしら？変態作者！」

作者 「お前は・・・下手シンデレ棍娘！」

美穂 「私が、下手なのは誰のせいかしら？」

作者 「本当に何で復帰しようと思つたんだよカス」

龍騎 「ちなみに何で復帰しようと思つたんだよカス」

作者 「それはね・・・」ないだアクセス解析したら今月も800アクセス超えててね・・・まだ見てくださる方がいるんだと思つと・・・自然と書く手が動いたんだ・・・」

美穂 「カツコイイ」と言つてゐるようで全く言つてないわよね?」

栄 「うん、全く言つてないよ?」

龍騎 「だいたいその方たちだって何か他のと間違つてクリックしちやつたんだろう?だれがこんな更新放棄した駄文小説読むんだよ」

作者 「俺もそう思うんだけどね・・・でも嬉しかったんだよ・・・」

「

栄 「ちなみに何で座談会からスタートなんですか?」

蒼馬 「それは、こいつキャラ名も技名も全部忘れたからだ!」

龍騎 「他には当時これを更新したときは本編差し置いてしぶりく話別アクセス1位だつたからだろ?」

作者 「全くもつてその通りです」

美穂 「相変わらず」こいつ最低ね・・・」

栄 「で?これからどうするんです? 続き的にはいきなり私メイ

ンの話ですよね？」

作者 「そうだね、次は栢でその次美穂やつたら新章突入だね！」

龍騎 「それまで10年かかるな」

美穂 「違つわよ、20年はかかるは」

作者 「そんなにかからないもん！」

栢 「じゃあ、脳内で考えてたのを文に起こしたら案の[走]酷い出来のもう一つの話は？」

作者 「何とか成るんじゃないかな？」

龍騎 「なるわけねえよ、カス」

作者 「取り敢えず頑張つていきたいと思いますので応援よろしくお願いします！皆様の応援が全てです！！」

龍騎 「子のダメ作者は応援がなきゃ生きて行けないんで取り敢えずお世辞でもいいんで応援してやってください、お願いします！」

栢 「私と龍騎の恋物語はこれからだ！」

美穂 「栢さん・・・そんな事言つと一生更新されませんよ・・・」

第一回 皆で座談会（大反省会）（後書き）

久しぶりに書きました。口調が変わってる気がします。全話読みなおしてきます。けど読みなおすのって恥ずかしいんですね、勢いだけで書いてますから。読み直すと恥ずかしくて死にたくなります。でも今回は頑張ってみせるよー応援よろしくお願ひしますーー！

第弐拾八話 強化を求めて（龍騎編）（前書き）

あけましておめでとう御座います・・・前の更新から気づいたら年明けました・・・今回は本編です・・・今まで何書いてたか忘れましたけど・・・

第貳拾八話 強むを求めて（龍騎編）

龍騎は本家に戻つてから一日も休む事なく父と剣を合わせていた。

答えは当然強くなるため。

何でと言われば脳裏には大切な人、村瀬 桂の顔が浮かぶ。

彼女を危険な目に合わせてしまつた後悔が龍騎を過酷な修行に向かわせている。

今は父と刀を打ち合つてゐる。

「くそ・・・何で一本も取れないんだよ！」

「そんな雑な動きで・・・勝てると思つか！」

龍騎が踏み込んだ刹那、父の返し技を喰らい刀を弾かれ決着はついた。

「闇雲に勝負を決めに行くからだ、もつと落ち着いて相手を見ろ」

「そんな事言つたつて・・・父をさぞやつて動いてるかよく分からないし・・・」

「まあそんな事言つてるようじやまだ俺は負けないな！」

悔しいがその通りだつたからそっぽ向いて座る。そのままじや絶対に栄を守れない。

「どうでお前……女でも出来たのか？」

「つ・・・! いきなり何言つんだよ!」

「いやー最近やたら熱心だなとは思つてたが図星かー今まで見たこと無い顔してるやで?」

自分が俺に顔が熱いのは分かつてた。恥ずかしくて口には出さないが。

「まあ少しばまともになつてゐるからその内一本ぐらゐは取れるよつ
になるんぢやないのか？に何時かかは知らないけどな！」

「じゃあ兄さんから教わったアレで行く・・・」

「お前……アイツと語したのか？」

「ちよ」と色々あつてね、構えてよ

相手に使うのはこれが初めてだつた。でも龍騎には決めれる確信があつた。龍騎の体は相手を切ることに全神経を傾けていく。そしてそれに応えるように父が動いた。

「何で来るかは分からんが……見極めてやる。来い！」

「行くよ・・・神鳴流
秘奥義・・・神鳴」

刀は弾き飛ばされた。龍騎のではない。

「お前——それ教わつてたのか?」

「うん、託されたんだ。。。心残りだつて」

「だが、ソレは同じ相手に二度利かないぞ? 次は神鳴に頼らず俺を倒せ」

「言われなくとも、倒してみせるぞ」

(神鳴は確かに強い。。。でも利くのは最初の一撃だけ。。。一回目からは避けられる)

「神鳴に頼らない力をつけなきや。。。栄は守れない。。。」

道場を出て空を見て誓う。大切な人を守る力をつけると——

第貳拾八話 強を求めて（龍騎編）（後書き）

何か久々に書いたら変な感じがします。と書つか前と書き方せんぜん違う気がします。大丈夫ですかね？ただでさえ酷いのにこれ以上ひどくなつたらと思うと・・・
頑張ります、次は村瀬編です。書いてみせる・・・

第弐拾九話 強さを求めて（村瀬編）（前書き）

3ヶ月ぶりの更新なのに皆さん見ていただいて有難うござります・
これからも是非よろしくお願いします・・

第弐拾九話 強さを求めて（村瀬編）

「龍騎が父と修業に励んでいたのと同時に村瀬もまた父の元で自分の弓術に磨きをかけていた。

「父上？私たちの流派って技少くないですか？双極矢と破魔矢それに昇竜流星群しかないじゃないですか」

「まあ弓術はそんなに作れなかつたんじやないか？先代達も・・・曲がる双極矢を考えただけでも大したものだと思うぞ？」

「それはそうですけど・・・龍騎は沢山あるのに私たちは戦術の引き出しが少ないと思いません？」

「村瀬がむくれ氣味に言う。確かに神鳴流は村瀬が見たもので8つ程あつた。もしかしたら末だ有るかも知れない。」

それに比べて自分の村瀬流は3つしか無いとなれば少しは不満もあるだろう。

「いいか？元々弓と刀では戦いたい相手が違うんだ。剣術は一体多数もあるが基本は一対一で戦えるような技が多い。居合なんて敵に囲まれた中で使つたつて勝つのは難しいだろ？勿論龍騎君の様な強者であれば覆すことも出来るが基本は難しい。だけどな？弓はそんな武器を差し置いて遙か遠くに飛ぶ。だから弓は前を行く者の後ろから彼等の戦いに祈りを込めて敵を削るように撃てばいい。」

村瀬の父は朶に諭すように言い続けた。

「それは分かつてますけど……この間は一騎打ちしたんですよ？弓は私一人ですから父上の言うように削るのは難しいのです……それに削る前に龍騎君と美穂ちゃんが難ぎ倒しちゃつし……」

中々栄が納得してくれないのでしょうが無く父は口を開けた。

「まああるにはあるんだぞ？未だお前に教えてない技は」

「本当ですか父上！？今すぐ教えてください、お願ひしますっ！」

村瀬は田を輝かせすぐにお辞儀しながら言つた。

「けどな？残りはお前の使つている『より大きく思い強弓』を使う必要があるんだ、いひいう事は言いたくないが女のお前には難しいだろ……」

父の忠告を聞いた後村瀬は迷わず言い放つた。

「構いません！それで強くなれるのなら……どの道筋力は必要だと思つてましたから。お願ひします。皆を護る力を私に習わせてください……」

「そんなんに龍騎君が好きか！なら教えてあげないと駄目か？」

「な……別に龍騎とは言つてないじゃないですか！」

笑う父に頬を染める娘。村瀬もまた守る為の力を求めて厳しい修行に挑む——

第弐拾九話 強さを求めて（村瀬編）（後書き）

これ書くために前に書いたのを読み直したんですけど、村瀬の秘奥義 昇竜流星群つて撃つたのいいけど結局止めさせたのは普通の矢だったんですね。無駄に大技なんで気を取られた隙に普通の矢を放つ・・・確かに勝てばいいんでしょうけど小説でこの終わりは・・・ありますよね。

二人ともお父さんの名前無いんですけど許してやってください。
次回は美穂編です！お楽しみに？

第参拾話 強烈を求めて（美穂編）（前書き）

気がついたら30回もやっているんですね、これ。ちょっとびっくりです。このぐらいのペースで最初から書いたら50は越してますよね。
・・本当に大した進みもしない話を待たせてしまつて申し訳なく思
います・・

第参拾話 強さを求めて（美穂編）

龍騎、栄が実家に戻り修行を積んでいた頃、美穂は一人山道を歩いていた。

「師匠・・・何処に居るんですか？アタシを拾つてくれた恩人・・・」

元々美穂の家は武術をやっていたわけではなく彼女が小さい頃、師匠と慕う男に拾われ棍術を教わり今に至る。

「アタシ一人でどうすれば・・・って、何？あのお爺ちゃん・・・」

美穂の視線の先には杖をついて歩く老人がいた。

「つて！？あれ杖じゃなくて棍じゃない！？何か腹立つなーーアタシの武器がお爺ちゃんの杖・・・」

美穂は一人呟きながら老人のもとに近づく。

「ねえ、お爺ちゃん？何で棍ついて歩いてるの？杖無くしちゃった？」

しかし老人は耳が遠いのか無視しているのか変わらぬ様子で歩いている。今にも倒れそうだが。

「アタシを無視するとはいひ度胸じゃない・・・目覚まさしてあげる！饗饌流奥義 地碎衝！」

老人より高い位置に立っていた美穂が老人の目の前に向かって跳躍し地碎衝を放つ。

「おや・・・饗饌の地碎衝かい。珍しいの〜」

「地碎衝を知ってる!?どうして・・・・!」

そう思つたのもつかの間、老人は地面についていた棍を下が上になるよう振り上げ美穂の棍の先端にぶつけようとした。

「思ったよりキレはいいけど・・・そんなんで弾けると思わないでよつ!」

お互いの棍が衝突した瞬間片方の棍が大きく弾かれた。美穂が振りかざした棍である。

「そんな・・・アタシの技が弾かれた・・・よく見るとあの棍・・・両端に鉄が付いてる、あんな重いものを・・・」

美穂の棍は文字通り木で出来ていて軽く扱いやすいが当たり負けしやすい。そのため地碎衝は先に棍を回転させることで遠心力を増し振り下ろす際の威力を上げる。

しかし老人の棍は鉄が付いていることで当たりの弱さを克服していった。

「貴方・・・何者?」

「儂は饗饌を継いだものよ・・・今は息子に任せたがの・・・」

「

「じゃあ・・・師匠の知り合いなのー?」

「師匠・・・?恐らくそいつは儂の息子じゃーまあ儂から見たらまだまだひよつ子だがの!」

「あの・・・アタシの棍にも鉄を付けてください、そして貴方の技を教えて下さい、強くなりたいんです!」

「この老耄にもまだ力になれるか・・・よからう、付いて来い娘よ。饗饌をお前に授けようぞ!」

二度師を得た美穂。栄、龍騎の力になるための修行はここから始まる――

第参拾話 強わを求めて（美穂編）（後書き）

別にこれ修行でも何でもないですよね。プロローグですね。
久しぶりなんで饗饌覚えてるでしょうか。「やようせん」ですよ。
僕も読み返すまで忘れてました。ややこしい名前つけやがって・・・

この間思いついたんですけど龍騎君に妹を登場させたあげます。
実のじやなくて戦いの中で拾つた感じの、俗に言う義妹ですね。
今まで一言も書かなかつたから?な感じになるかもしぬませんが頑
張ります。場合によつては前の話を修正します・・・

これからもよろしくお願いします！

龍騎、妹とい。（前書き）

更新の間隔が若干空いてしまいました。申し訳ないです。

宣言通り妹登場・・・果たして今回JSA可憐にヒロハインとなれるのか・・・

龍騎、妹と。

栄、美穂がそれぞれの地で修行を積んでいた頃、龍騎も修行をしていたのだが——

「兄様、久しぶり……」

「桃花^{とうか}、離れて……」

妹の大神桃花に利き腕の左腕に抱きつかれていた。

桃花は黒くて短い髪が小さめな身長と相まってよく似合^うつ。前に会った時より少し大きくなつたが変化はそれぐらいだ。

桃花は龍騎・煌輝の本当の妹ではなく、ある戦場で一人の父が拾つた孤児である。

桃花を拾つた時に煌輝は神鳴流の修行に当たつていたため世話は龍騎が主にしていた。

結果桃花は龍騎に良く懐くようになつたが龍騎も神鳴流の修行を開始し、今日久しぶりに桃花と再開したのである。

「それにしても、何で俺が帰つたときはいなかつたんだ?」

「それは···私も、神鳴流の修行をしていたから···」

「桃花も神鳴流を!?父さん、桃花に刀は振れるのか?」

「心配するな、龍騎そりゃいくら先祖の産んだ神鳴流が凄くても流石に女に男の全力は防げない。だから別なのを教えてやつたんだ、なかなか筋がいいんだぞ？」

「別なのってなんだよ、他に流派なんかないだろ・・・」

龍騎の父への間に腕につかまつたままの沙耶が答えた。

「神鳴流は神鳴流でも・・・神鳴居合流を・・・」

「居合！？桃花が？」

居合とは刀を鞘に納めた状態が基本姿勢という特殊な剣術である。龍騎のように戦闘に入った瞬間刀を抜くのではなく、敵が間合いに入った場合、もしくは斬りかかってきた瞬間に刀を抜き捌いて反撃して敵を斬るというまさに一撃必殺の剣技である。

「私・・・結構上手いって言われてるんだよ？」

桃花が首を傾げながら言つ。あんなに小さかつた沙耶が居合術なんて龍騎にはにわかには信じられない。

「じゃあ、桃花。今から俺と木刀で勝負しよう。沙耶の力を見極める。」

「分かった。兄様に私の居合、本氣で使つね。」

その瞬間、可愛い妹は一人の剣士の顔を見せた。

その後、道場にやつてきた二人は、木刀を持ちお互いに距離をとつ

て構える。

勿論、龍騎は木刀を抜き、桃花は未だ木刀を鞘に収めている。

「それじゃ、初め！」

父の合図と共にお互に緊張感を増す。

（当然、俺から仕掛けることになるけど・・・下手に行つたら危ないな。）

居合はほぼ確実に相手が来てからの攻撃となる。当然隙を見せれば攻撃の間に斬られてしまうだろう。

（でも、行くしか無い・・・！）

龍騎は右足を強く踏み込み一気に桃花に接近した。そして縦に構えていた刀を水平に構え直す。

「神鳴流奥義 式の型 翠蓮！」
すいれん

一度目の前で刀を横に振り、そこから刀を反転させ再度横に斬りながら相手の腹の前で突きへと変化する複雑な技である翠蓮。まずはこれで桃花の実力を見ようとした。

「つ・・・！」

桃花は体を半歩ほど後ろに下がつて一振り目を躱した。さうに再度横から斬ろうとする刀に――

「居合 後の先」

右手で高速で抜かれた刀は龍騎の刀を弾き、そのままの勢いで龍騎の首の横を通り過ぎる。

そして剣先が下に向いている状態から剣先を上にし、首筋に斬りかかる。

「くつー。」

龍騎は両足で後ろに跳躍し何とか回避した。

(桃花・・・想像以上に強い。居合だけなら俺より強いかもな・・・)

一応龍騎も居合の鍛錬を積んだが、桃花のように極めるような修行をしてこなかった。

桃花は龍騎が後ろに下がったのを見て一度刀を鞘に収める。

(次は私が見せる番だよ、兄様・・・)

瞬間。桃花は溜めを見せない見事な動きで龍騎に迫る。そして龍騎の反応が遅れたのを見逃さなかった。

「居合 先の先」

今度は返しではなく先に刀を抜いた。鋭く抜かれた刀は龍騎の脇腹を切り裂く勢いで伸びてくる。

(速い・・・)

何とか刀を当てて桃花の斬撃を受け止めたがそれで桃花の攻撃は終わりではなかつた。

龍騎が放つた翠蓮のように剣先を今狙つたのとは逆の脇腹に向け構え直し、瞬時に刀を振つた。

「くそつー。」

「今のを避けた！？」

龍騎は片足を軸に回転し、刀との距離を計りながら後ろに飛び紙一重で躲す。さらに刀に己の刀をぶつけ、桃花の追撃を阻止する。

龍騎が一度構えなおしたときにはすでに桃花は刀を鞘に收め、次の動きに備えていた。

今度は龍騎が踏み込み前に出る。次こそ攻めきると思いながら。

「神鳴流奥義 御の型 猛雷槌！」

上段斬りから刀を持つていて両手を持ち替え、剣の軌道を変える技で、急な変化により防御は困難な技である。

「居合 後の後」

猛雷槌で生まれる最初の虚の振りに対しても居合を放つ、桃花。刀を弾かれてくない龍騎はその時点で腕を持ち替え剣の軌道を変える。それこそ桃花の目的だった。

刀の軌道が急激に変わつてもこの場合、変わる瞬間を自分で強引に決めさせたために刀の動きが読みやすい。

龍騎は猛雷槌も防がれ、また後ろに下がることとなつた。

(単に居合が上手いだけじゃない、受けが柔らかいから攻めづらい。)

桃花の受けは力で相手の攻撃を止めるより、技術で相手の攻撃の向きを逸らしたり、威力を分散させることに特化していた。これにより刀は傷を受けにくく、相手の隙を生みやすい。

(ちょっと、禁止手だけど・・・使うか・・・)

ここで龍騎も刀を鞘に納め、重心を低くし居合の構えを見せる。桃花も同じ構えだ。

「神明流 秘奥義 神鳴」

(只の居合の動き、これならーー)

「そんな、刀が・・・」

桃花の刀は弾かれていた。神鳴流の奥義を二つ防いだ桃花でも秘奥義の神鳴は防げなかつた。

「勝者、龍騎。お前——あれに頼りすぎだぞ?」

「分かつてゐる、でもこうするしかなかつた」

「桃花、神鳴は変幻自在、簡単には防げないよ」

「兄様・・・やつぱり強い・・・」

桃花は驚きの色を浮かべながらも龍騎の元に近づいた。

「父様・・・私も兄様と行きたい・・・駄目ですか?」

「まあ龍騎しだいだ、どうする?桃花も連れて行くか?」

桃花の突然の提案に驚きつつも龍騎は落ち着いていて、

「桃花が来たいならいいよ、但し覚悟はしておいてね

「はい、兄様。ありがとうございますー」

桃花は満面の笑みを浮かべて龍騎に近づいた。

「それじゃ、今日は久しぶりに・・・一緒に寝ましょー?」

「桃花、それ本気で言つてるのか・・・」

龍騎、栄、美穂、そして桃花。四人が集つ田は近づいてゆく――

龍騎、妹と。（後書き）

はい、どうでしたでしょうか。桃花さん。実は最初沙耶といつも前
だったのですが、書いていて沙耶が鞘から刀を抜いて・・・みたい
になってしまい駄洒落みたいになつたので途中で名前変えました。

何だか最近龍騎君弱くなつてる気がする・・・まあお父さんは超強
いし桃花は一応神鳴流の方だから技の動きは分かつてているからでし
ょう・・・ちなみに未だもつたばつて動きを書いていない神鳴は
その内動きが詳しく書きます。考えましたけど・・・凄く下らない
技です。これが秘奥義でいいんでしょうか・・・って感じの技です。
これからも応援よろしくお願ひします・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7770/>

武神伝

2012年1月13日22時58分発行